家庭雜誌

第四拾參號

讀書の時節　精神に間斷なき糧を與ふべし。
磁石の北を指さゞる談　不思議必すしも不思議ならす。
母の遺言　追憶するに堪ふべけんや。
つれなき命　眞乎、烈乎。
毀れ茶碗　亦悲しむべし。

第二日清軍記

印刷中

第一日清軍記に於て江湖に大喝采を博したる筆者更らに大々喝采を博せんものと此數週來外出でもなさで一と間の中に閉ぢ籠り緻密該精の筆を揮ひたる第二日清軍記は今や**稿脫**し印刷者の手に渡りぬ讀者の電眼に上ぼる應さに**週日の中**に在るべし

第二日清軍記は筆を**山縣大將入韓**に**起**し**最近戰爭旅順占領**の**勇擧**に**收**む章を重ぬる七十有二寒夜爐を圍んで之を讀む悲壯起て舞ふものあるべし雄烈鬼神を泣かしむるあるべし艱苦嘗盡の狀覺へず衣を脫するものあるべし第一の軍記に光彩を放ちたる筆は第二に至り更らに萬丈の光焰を發しぬ

米僊、米齋、金僊の**實見實歷畫**此間に**挿入**せられ層一層段一段の光輝を添ふるもの其數三十有餘箇眞景躍如たり活如たり

發兌元
東京市京橋區日吉町四番地
民友社

再版

家庭叢書第五巻

小兒養育

定價十錢
郵税二錢

本書は專ら小兒の身體を養育する方法を例の平易明白の文章を以て最も親切丁寧に説明したるものなり則ち(一)現今の小兒養育(二)懷妊中の心得(三)母の乳(四)乳母の乳(五)牛の乳(六)小兒の食物(七)入浴の心得(八)小兒の身體及看護(九)小兒の衣服及寢具(十)小兒の衛生等なり

再版

家庭叢書第四巻

家庭教育

定價十錢
郵税二錢

本書に對し各新聞の批評は實に如左也

◎新家庭の建設に熱心なる民友社の家庭叢書は既に第四巻に及べり本書は家庭の教育に關して父母の位置、職務、言語の開誘、書籍の選擇等其あらゆる事項に付或は理論より説き或は實際より徴して新家庭を造らんとを誘導奬勵せり文章は例の平易明白(讀賣)◎同じ叢書の第四巻、前巻は專ら玩具の撰擇に關して縷説し本巻は廣く兒童に對する父母の心得を説明せり(一)家庭教育の本旨、(二)父母の職分、(三)家庭教育の陷り易き奬などよりはじめて小兒を薰陶する種々の方法を示したる、文章例の平易にして俗耳に入り易し、二書共に親たる人の一讀を要す(早稻田文學)

三版

家庭叢書第一巻

家庭の和樂

定價十錢
郵税二錢

再版

家庭叢書第二巻

夏の家庭

定價十錢
郵税二錢

再版

家庭叢書第三巻

玩具と遊戯

定價十錢
郵税二錢

新刊

家庭叢書第六巻

家庭衛生

定價十錢
郵税二錢

本書は例の簡易明白の文章を以て最も精細に最も實用的に左の諸件を記述せり曰く(一)家庭衛生(二)食物の節用(三)居住の善悪(四)衣服の撰擇(五)日々の衛生(六)婦人の衛生(七)簡易療法(八)家庭看護等あり、家庭衛生家の必讀を要す

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

塚越芳太郎著

十二文豪第六卷

再版

近松門左衛門

肖像自筆入

定價十八錢

郵税四錢

第一版は發兌三日ならずして盡き第二版は已に去十四日を以て成れり

◎德富一敬先生は讀て『傳聞元祿文明事。始看詞林爛熳華。擧世無人認水鑑。笑投戲劇談生涯』の語あり◎經濟雜誌は評して『近松門左衛門が戲曲家としての性情を抽き出だして餘蘊なきが如し此種の文學に嗜好なき余輩すら讀んで卷を掩ふ能はざるに至るものは文章の妙にして批評の奇警斬新なるが故なるべし』の言あり◎山路愛山氏は『眞に此老面目躍若たりと可申候』といひ『氣韻に富みたる御文躰春煙秋雨の如く人をして綿々の情を惹かしむる所いつもながら感佩仕候何事も露骨ならざるは尊兄の御特色と乍憚奉存候』等といへり◎大坂朝日新聞は曰く『予が其傳記以外に近松を描出せんとしたる手腕に至りては決して平々一樣の看をなすべきにあらず通讀の際人をして轉々子が冥想暗索の餘鬱勃たる神意が時に近松の靈氣と相觸着せるが如き妙境に會すること少しとせず近松が社會的戲曲を以て日本人を代表したりといひ史的戲曲を以て日本人の理想を代表したりといふが如き其の眼鋭紙背に透るもの殊に近松の花たる文章の咀嚼と其實たる理想を人生、男女、社會、道德の諸面より一々其證例を示して斷定を下したるが如き其精苦最も得易からざるもの』と◎大坂毎日新聞亦云ふ『彼の詩人的生涯を前後の二半生涯に分ち更に之を四期に分ちて第一期を普通修業時代第二期を高等修業時代第三期を得業時代第四期を成熟時代とせり蓋し其額を得たるもの歟其史的戲曲と社會的戲曲とに大徑庭ある所以を論じて社會に對する彼の境遇は彼をして史的戲曲に於ては彼の筆を枉ぐるの已むを得ざらしめたる所以を論じ社會的戲曲家たる彼は眞成の彼にして史的戲曲家たる彼は眞成の彼にあらずと説破する所議論明斷些の餘蘊なし思想界に於ける彼を論じて其個人想と社會想との一致したる者之を人生最大の喜悅として取て以て喜戲曲の料となし其個人想と社會想との一致を希企するの極却て互に相抵觸し遂に爲に個人の現存在を破碎するに至りたるもの之を人生の聖大なる悲痛として取て以て悲壯戲曲の料となしたりと説く處明快巢林子蓋し地下に首肯すべし其文章は民友社一派の獨得なる流麗愛すべき文字多し』と◎自由曰く『著書は門左衛門に於ける徹頭徹尾温かき同情を其流麗なる筆に注でいと殊勝にものせられたり此筆を以て此人を叙す一讀直下趣味自ら掬すべく兎にも角にも門左衛門たる面目は二百餘年の今日新なる花を彩りて一般世人に喜ばるべし』

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

竹越與三郎著

六版 支那論

定價拾錢
郵税二錢

四版より

歐洲勢力東漸地圖

及び

清韓實用地圖を添ゆ

各新聞は如何に評せし乎

女學雜誌曰く『流麗雅潔の筆を揮つて一瀉千里の文を行る、間ま堂々大政事家の識見を示す、戰後の要償日佛露三國同盟の策、志士の猛省を促す』新朝野は曰く『著者が如何なる抱負を以て、此冊子を著はしたるかを想見すべし、篇中の諸論皆奕々として紙上に躍り、一讀快哉を呼ばしむ、就中我輩の最も奇警とする所は、同盟論は何を贏し得たる乎。二十世紀の新權力平均にあり、其文品に至ては筆々雋快、字々金石の韻あり』毎日新聞は曰く『得意の奔放優麗なる筆を以て大國の大抱負を描出し人をして快と呼ばしむ、日露佛の三國同盟を説く處壓卷の文字也』報知は曰く『我國の淸國に於る一は文明一は蠻野、進取と退歩、到底共に東洋に並立す可からざる所以を說き皆過去の事實と將來の推理に據りて肯を立つ尙ほ其「我軍」一たび海に浮ぶの日は世界の舞臺に上る覺悟なかる可らざる也』との警語に至ては恐らくは此著に於ける神髓ならん』大坂朝日は曰く『日淸同盟論の迂謬を嗤ひ兵火に非らんば淸國の惰眠を醒す能はざるを說き最後に日露佛の同盟を以つて我が淸國に對する大希望を貫ぬかんとしたるが如き熊士胸中の蘊蓄する所爽の思ふ所に匪すと謂ふべし』

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

平民叢書

◎第一卷 十九世紀之大勢　定價十二錢 郵税二錢
◎第二卷 世界經濟上之變動　定價十二錢 郵税二錢
◎第三卷 國家と政府　定價十二錢 郵税二錢
◎第四卷 敎育と遺傳　定價十二錢 郵税二錢
◎第五卷 文明之弊及其救治　定價十二錢 郵税二錢
◎第六卷 現時之社會主義　定價十二錢 郵税二錢
◎第七卷 經濟と道德　定價十二錢 郵税二錢
◎第八卷 歷史攻究法　定價十二錢 郵税二錢
◎第九卷 哲學變遷史　定價十二錢 郵税二錢
◎第十卷 白晳人種の前途　定價十二錢 郵税二錢
◎號外 銀貨之過去現在未來　定價十錢 郵税二錢
◎號外 責任內閣　定價十錢 郵税二錢

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

社告

家庭雜誌は凡て前金に非されば發送せず、見本は郵券五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵劵代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割增

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價

一冊　金五錢　郵税　金五厘
半年（十二冊）前金五十錢　地方　金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓　共　金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　有馬俊彦
編輯人　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治二十七年十二月十日發行

家庭雜誌第四拾參號

目錄

社説
秋空那處不雄飛……久保田米齋畫
讀書の時節……一

科學
磁石の北を指さゞる談……二

文藝
母の遺言……筑峯女史…七
悲しき憶出……志川生…九
征淸の途に上ると聞きたらられの送り玉ひし寫眞を拜して……松琴生…一五
子供の時刻……松が枝女譯…一六

史談
つれなき命(上)……一七
毀れ茶碗……無一生　二二

雜錄
最近社會思想一斑……二三
山嶽探撿の發達(二)……二八
秋空那處不雄飛……三〇

家政
家庭の教育……三〇
感覺の教育
學藝片々……三四
地球の年齡
世界最長のトンネル
鼻血の養生……三五
クリスマスには何を食せんか……三七
樂しみ茶碗
白酢蕪
花梅干
つくいも油あげ
櫻かまぼこ
豆腐包み
手藝案内……三八
自製の「シャツ」
押繪の巾着
廢物利用
社交一斑……四二
流行の栞……春夢…四二
お正月の髮飾
面白き櫛及簪
禮式用櫛と笄
春衣の準備
羽子板
新年の名刺は如何に流行すべき乎
日用品物價……四六

時事一斑
遠征の人……四六
思を異鄕に寄す……四七
軍夫救護會……四七
赤十字社……四七
犯罪の減少……四八
旅順の勝利……四八
祝捷大會……四八
國家教育大會……四八
大に注意せざるべからず……四八


霊鷹献瑞

家庭雜誌第四拾參號

(明治廿七年十二月十日發兌)

社説

讀書の時節

(精神に間斷なき糧を與ふべき事)

天高く氣澄み、梧葉の秋を驚く間もあらずしてはや蘆のまろ屋を訪るゝ風の音に秋深きを知る時となれり。から衣長き夜すがら打つ聲に何人か能く寢覺せざるものあらんや。

念ふに世人は如何にして此の冬の長き夜を最も有益に且つ最も樂しく過ぐさんとはするぞ。冬は家庭の時節なり、父子弟兄火桶を圍みて樂しき會話に晝の疲れを忘るゝものもあるべし。孤燈の下に阿兒の寢顏を顧みて針仕事の手を休むる母もあるべし。隙漏る風の寒きに遠征の夫婿を懷ひつゝ獨り寢ざる思婦もあるべし。去れども何人も其若干時を割きて之を讀書の用に充るに、今日此頃の長き夜より善き時はあらざるなり。

人は食物なしに其體軀の健全を永續せしむる能はず。從つて精神の糧なしには亦精神の健全を保つこと叶はざるべし。而して精神の糧は第一に讀書なり。

學問は固より讀書のみに限らずして、讀書の外に學問の多くを有するとは人の知る如くなれども、讀書の外の學問のみにては未だ滿足するに足らざるなり。一層遠く一層廣く一層變化ある學問は、同時に之を讀書の上より得ざるべからず。

殊に婦人は最も多く家に在りて變化ある四圍に接すること男子より稀なるものなれば、其讀書の學問を要すること最も切ならざるを得ず。社會を其天地とする男子にして猶少しく讀書を怠る時は忽ちに時勢に後るゝ

ものなるに、况して一家を天地とする婦人にして之を怠るをや。

故に婦人は實際の上に於て學問すべき機會の男子より稀にして、讀書の上に於て其不足を補はざれば、男子と並行すること難きのみならず、家庭の事は極めて煩瑣にして幾んど餘閑を得難きものなれば、此の冬の夜の永き時節を利用すること、肝要のことなり。

夜は四圍靜に氣定まりて最も理會記憶に便宜あり。且つ晝の間は手足にまつはる兒女も已に靜かなる臥床にありて、家事に寸暇なき主婦さへ此時ばかりは徐ろに其書帙を繙くを得べし。

尤も學問すればとて實際に用なき書を多讀し、或は有用なる書にても爲に夜更かしして健康を害する如きは甚だ不可なること勿論、夜間の學問仕事は晝間よりも人を疲勞せしむるものなれば、此邊は大に注意せざるべからず。

唯人は常に其の身躰に食物を與へざるべからざるが如く、其精神にも同じく之が糧を與へざるべからざるを以て、日常多少の時間を割きて間斷なき讀書學問をなすべきものたると同時に、讀書學問に極めて多くの便宜ある冬の夜は最も之を利用するを要す。同時に書物の撰擇に注意し、又身躰の健康を顧るを要す。果して然らば庶くは此の讀書の時節に辜負せざるを得ん。

科學

磁石の北を指さゞる談

曾て米國に一人の青年學者あり。今日は幸ひ休日なれば、遠足せんとて、友人三名を語らひ、カブハムと云ふ大なる森の中を通行せり。一人は奇石を集めつゝ、一人は奇木を集めつゝ、一人は動物を追ひつゝ、勇ましく行ける中、青年學者は過つて路を失したり。道は

益々深く、木は益々繁げりて東西を辨せず、日陰かすかに成るもたしかなる時間を分かち得ざれども、晝食の辨當を食してより三四時間も立たりと云もあれば、早や夕方には餘り遠からざるべし。かくして迷ひ行く中には、如何なる猛獸に出で遇ふも知れずと、途方に暮れたる時、ふとかくしに手を入れたるに、晝間ちらべつゝありし磁石を見出だせり、こは天幸なりと喜びつゝ、恃はたゞ此の磁石の針一本、北は此處なりされば汝の家は彼處なりと知らするまゝに、木を分け谷を越へ、萬難を犯かして漸やくに、森を脱けいで、暫ばらくは人跡まれなる細路をつたひ、とある村に近かづける時は、早や日は暮れはてたり。遙の燈を喜望峯として、近づきて己が家の方角を尋ね行きしに、こは如何に家より數里の西にありき。これより此の磁石を疑たがひ始じめ、翌日家に歸りてより、更らに精製のものを以て、試驗せしに、何れも同じく森中にては二十度づゝ西を指びざせりと。こは近年にありし事實なるが磁石の種々なる方向を指すとは、已に十三世紀の頃より、歐洲にて發見せられたりき。彼の米國發見者の名譽を負へる、コロンバスも千四百九十二年九月十三日、彼が第一航海の途次、カナリー島のはてなるフエローより六百里を隔だゝりたる所を通行する際、磁石の傾むきしを見出だせり。

磁石の傾むくは奇なれども、尙ほ不思議なるとあり。そはコロンバスは、始め歐羅巴の近傍にて、磁石が東に傾きしよと見つゝ進む中、一變して遂に西に傾むくに至れりと云ふに、今日にては其の同じ歐羅巴海中にて、其時東に傾きし所に至れば、今はかへつて西に傾むくに至たれり。之により他の例にもよりて考ふるに磁石は年を經るに隨ひその、傾きを異にするとを發明せり。

かゝる事實よりして、磁石力のことは、益々學者を迷は

し始じめ、益々學者に面白味を感ぜしめぬ。今日の學者は昔しの如く、不思議の出來事を集めて驚くのみにては滿足せず、その出來事の根本を穿ちて、その巾も、深さも、廣さも、重みも、計り知らざれば止まざるなり、殊と更らに磁石力と云ふとに付きては、面白き感覺を引き起したり。

さて地球上は磁石力によりて二つに分かたれたり。一は磁石が西に〳〵と傾く所にして、他は東に傾く所なり。而して其の中間に至たれば、殆ど眞北を指すが故へに、そこを境へとして地球を二分せり。

英國の全部と、歐羅巴の北部なるロシヤ、トルコ、アラビヤ、アフリカの全躰、印度洋の大部、オ、スタリヤの西部、大西洋の殆ど全躰、グリーンランド、カナダの東部、米及びブラヂルの北部は西に傾むく部分に屬すと雖も、殘る東部に傾く部分の中にても亦た西に傾むく所もあり。即ち日本、支那、滿州等の如きは是れなり。

又た一の注意すべき事あり。そは東に傾く度と、西に傾く度は相等しからずして、東の方、西よりは甚だしきにあり。一例は亞細亞の大陸は、その全地殆ど眞北を指すと云ふも、不可なき程なるに、グリーンランドの北部、及びバフ井ン灣に至れば、非常に西に偏し、それよりだん〳〵北に引く程、磁針はくるひ來りて、遂に甚だしきは、北に向ひし針全く一轉して南に向ふに至たる。

磁石とは何物ぞ

磁石とは何物ぞ。如何なれば北に向き、西に向き、又は南に東に變ずるかは、早くより學者の腦を絞ぼりつゝある問題なれども、今日に至る迄、未だ確しかにして少しも眞違ひなしと保證すべき學說は現らわれず、只だ地皮の下に磁石脈と云ふものありて、北より南に亘たり、地上の磁力を引き付けつゝあるが、地層の變

化と共もに、其方向を變ぜる所あるがため、磁力の方向にかくは變化を生ずるなりとの說、やゝ學者の一致する所となれり。されど之の說とても、未だ不完全なる所ありて、全く信ずるを得べからざれば、我等は其變化に付きての事實を集むるに止どまりて、暫らく學說の事は說かざるべし。

英國一國の歷史に徵しても、隨分種々の變化はありき。十五世紀の頃ろは、總じて東に傾たむく事多かりしに、十六世紀の中頃に至りては、此の傾むき漸々薄すらぎ、千六百五十七年に至りては、殆ど正北を指しけるが、それよりは又だ漸々と西に傾く樣になり。その傾は、進むのみにして止まる摸樣なきが故に、學者は預定して北針は遂に全く南を指すに至るべしと云ふに至たれり。かゝる有樣にては、磁石の針は恰も時計の如くにして、くる〳〵廻りて殆ど一晝夜の變化を顯わすに似たりとて、皆々笑らへる內、佛國の天文學者にして且つ理學者なるアラゴー氏は、近來磁針の西に向ふとの漸く減じ來れるを發見し、且つ曰くほどなき內に歐洲の磁力の西に變ずる事は全く止まるに至らんと。これより數年の後なりき、ロンドンとパリの磁力を比較せし學者ありしが、ロンドンにては二十五度の西方に偏するを終後として西に向くとは全く止まり。パリにては二十二度半に至りて止まりしが、ロンドンはパリより五年早やく止まりき。

磁針の振動

又た先きの學者アラゴー氏は、いと精密なる觀察を爲せり。即ち少しも長短のなき、同じ位の磁針を絹糸にて繫なぎ、棒の兩端にかけ置くに、夜の十一時頃に至る時は、北になれる方の磁針、東より西に動搖を始じめ、最も東に至るは朝の八時にして、最も西になるは一時十五分なり。西の極に至れば又た東に傾き初め、午後八時はその最終にして、又たそろ〳〵と西に戻ど

り。夜の十一時に至たれば、又た東に向ひ行。く勿論東とか西とか云ふは、たゞ僅かに度の五分計り動搖するのみなれば、平生二十度の東を指せる磁針は、それより左右僅かに五分を動く故に、地球より云へる眞の北より比較せし東西にはあらざる也。

右の試驗により、更らに一の事は發見せられたり。即ち一日の中にて、磁針は太陽に隨て動く事と、一年の中にて夏はその動搖多くして冬は少なきと也。又た磁針の動くは、唯だ東西のみならで、上下にもあるとは近頃學者の熱心に試驗せる所なり。今磁石を携へて南半球より北半球に向つて旅行せんに、南半球にては針南に下りたるに、北に行くに隨ひだん／＼北の端の下るに至る。その南北平均を保もつ所を指して、磁石力の赤道と云ふ。此の赤道は地球の赤道の如く、眞直にもなく、又た平均もせざれども、大約赤道と十三度の角度を以て接われり。即ち北より南に向ひて走れる線は、グリンウ井ツチより三度の西部を通り、南より北に向かへる線はグリンウ井ツチの百八十七度の東を通りて、地球を一週せり。勿論其間に切れたる所もあり、不規則なる所もあり、大西洋の如き動搖の甚だしき所も少なからずして一定せず。

月も亦た磁力に關係あるはサビン氏の說く所なり。月の關係よりも尙ほ大切なるは『磁力の荒し』なり。荒らしの起る數日前よりは、磁針は誠に靜づかにして、顯微鏡の力を借るにあらざれば、その振動を見る能わざる程なるが、俄かに大混雜を始むるに至たるを云ふ。その原因は各入の推察に任かすべけれども、地球全地に同時に起ると云ふ事は、その勘考の一財料とするに必要なる個條也。それと能く似たる現象は北光の時に見わるゝとあり。磁力の荒しは、時の數時間より一日の長きに亘るとあり。

太陽の異光と磁力の變化

千八百五十九年九月一日、二人の學者申し合わせ、一人は英國のオックスフォードにて、一人はロンドンにて、太陽を觀察してありしに、二人共不意に太陽の表面を横ぎれる鋭き光を見たり。肉眼にては、その光はそろ〳〵と通過せし如くなりしも、其實一分間に七千里の速力にて走りしにてありき。さて此の光は何物にや、キウにありし磁石は同時に甚だしき困雜を爲せしが、こは獨り其地に止まらず、西印度南亞米利加及びオ、ストラリヤにも同じ現象ありき。かゝる内ワシントンとヒラデルヒヤの電信局の技手は、非常なる電氣に打たれたりとの報ありと聞く內、ベイン及びノールエーの電信は、火事を發したりとの報道續々來りたり。その後如何ならんと人々安き心もなかりしに、夜に至り南北極共に甚だしき電光ありき。之によりて見れば磁針に荒しの起りしは、かゝる奇異の變化の前徵なりき。それより以後綿密なる學者ありて、晝夜太陽の面を絶へず調らべけるに。遂に磁石の荒の起る時には、必ず太陽の面に黒點のあるを發見せり。未だ此の黒點の何物たるを知るによしなく、且つ黒點が、磁力を防ぐるか、磁力が、黒點の原因なるをも說き得るものなきは遺憾なれ。

文藝

母の遺言

筑峯女史

つれ〳〵をとふ人もあらしにつれて音つるゝ秋風のことしはいとゞあわれ身にしみ蓬生の軒もる月をなかめつゝ忍ぶにあまる秋の夜の永き別れとなりぬはゝその蘺の下小草たのむに枯れし其の夜より眠むられねは夢も見ず露けさ増る袖袂のかわくひまとてなかりき。世

に親子の死別れはと悲しきものはあらじかし憂き事を菊月の初めつかたなれし都をあとに見て歸るもうたて故里へかざる錦のそれならで朝夕無事を神かけていのりしかひもあすか川きのふまても變りなく御在しませと思ひしかぞの君先つ頃より病の床に臥し給ひぬとやからの元よりいひおこせしつれなき志らせにいと驚きとやせんかくやと心地まどひもしもの事もありもせば殘るわらは等いかにせん五十の山路は越え給ふともなど快よくなり給はぬ事のあるべきぞ常には幸なき友達の物語りきゝては慰めし事もありしが今は我身の上となりぬ忍ぶにあまる袖袂の濡てほすてふよしあしをはやとく行きてきかまほしとく〳〵と車を馳せて上野なる停車場へと着くまもあるや鳴り渡る發車を告る鈴のこゑかまびすさに驚きて乘る間もをそし車は黑煙を吐きて早や動き出しぬ心せく身にとりては速してふ氣車もけふのみなどおそきと慰さむよしも窓の外を見る目も秋のそら曇りまねぐ尾花や女郎花誰れに情を村雨になやむ風情も中々にはや利根川を打渡り筑波あしの尾山々に霞か雲か山かつの炭燒煙りを見るにつけあわれはこゝに鳥邊野もかくてやあらんと重き思に沈みぬる折しも告ぐる驛夫の聲ともろ共に人推しわけて差し招く迎ひの車夫の手車に乘りうつりあへぎ〳〵走るは夢かうつゝともなく我家に着きぬれば家の内所せばきまで打集へる數多の人に禮をなす間も遲しと枕べにいたり今歸り侍りぬと告ぐればいと早かりしさぞなつかれてありつらんと慰さめ給ふ御心のうちやいかにと悲しさも音にこそ立てね夏虫の日頃戀しきはゝ木ゝの今や消えなん有樣にむねはやちさくもゝちたびくり返し返してはかた糸のよにたのむべきは藥師のみ屆かん限り手を盡くしいのりし神の惠にや病ひ少しく怠り給へばこは喜ばしやいと嬉し我身の勞れやいのちだもかぞの爲めには何かせん今一度の本復をと看病なしつゝ祈

りつる甲斐こそなけれ又してもたのみ少なくなり給へば承はり置くべき事もやと尋ねに重き枕を上げ今こそ神の御惠のいと有難きを一層深く感じたり平生何事もなき折はかくまでにはなかりしも我身我力のみにては行かぬもの皆神わざと覺りては苦痛もなけれ思ひ殘りもあらじかし唯信神を怠らず家業大事に身を勞はり父上や兄弟の事どもを深く賴むとの給ひていとやすやすと此の世をば跡に見捨てゝ逝き給ひぬるその時は共に消えなん心地して此の世の事は忘れにきされど嘆きて健康を害する時は却つて不幸なんめりと自ら己れを勵まして跡の始末を終りつゝ再び東都に歸り來て過ぎし事共想ひ出てゝは此の日をば何事もなく送るも皆神の惠とイヤ增しに感謝、勉勵、養生の念の愈起りしも皆母上の御敎へと思へばいとも有難し

悲しき憶出

（母の最后）

播志川生

吾が母上の病の床につき玉ひてより、はや一月あまりとはなりぬ。母上の病癒へて、吾等と共に食事し玉はんは今日にやあらん、明日にやあらんと、始めの程はいとかなしかりしが、今ははや吾心なれて、母上の臥床を出で玉はぬをも心にかけずなりぬ。我母上のこの度の病は產のなやみなりとぞ人の云ふなる。明日にもならばうつくしき坊樣の產れ玉ふべしと、兼て吾母上の看護にとて我家に起臥せる媼が吾に語りしこともあり、又は吾姉上の同じ事を云ひ玉ふに、何時我弟の生れんかなど、吾はひとり心に待ちつゝ、日々學校に通ひぬ。程ふれども音なく、吾はいつ我弟の生つべきと姉上に問ひて、姉上を笑はせたる事もありき。吾は日

曜の日には、常に朝餐を終りて、母上の臥し玉ふ一室に入りて、そのそばに行きぬ。月に餘りての病なれば藥品の臭氣の鼻を突く計なるに、くさき事よと云ひつゝ、吾母上の臥し玉ふ此方の側に炬燵を擁しければ、母上はかの爐に己が腹部を搦ませながら、我方を見、やがて我病も癒へん、さらば此部屋をも拭ひつ、掃ひつせんほどに、そをしばらく待てよと苦しさを打忘れて、微笑みながら語らひ玉ふに、吾は只うなづきたるのみ。斯くて姉上の來りて、此は母上の見舞にとて貰ひ玉ひしなり、それをば、汝に得させんに、こゝにて食へよとて、味よげなる菓子いくつともなく、炬燵の上に置き玉ふに、吾は食ひながら、きのふ風よくして、紙鳶の高く揚りしことなど打語へば、母上喜び玉ふ事かぎりなかりき、今にして想ふ、斯る事こそ病める母上を慰むるにもともよき手だてなりけれど。

ある日の事なりき、學校より歸りて我家の門を入らんとしたるに、玄關の淸く拭はれたる方に、足駄の幾つともなく並べあるを見て、いぶかりつゝ內に入りて姉上に歸り來りぬと告げ、今日は何事ぞと問へば、弟生れつと答へ玉へり。そは誠か、と笑みつゝ問へば、姉上、誠にこそ、泣音の聞へぬは眠りやしつらむ。吾行き見んとて奧の方に行かんとするに、今日はくす師の君のあまたいませば、奧には行かぬものぞ、早く外に出でゝ紙鳶を揚げよとて、我袂に菓子數多入れ玉ふに、吾は意勢を得て外に出でつ。

其日は川の堤に出でゝ紙鳶を飛ばすに、風好くて中空高く紙鳶は尾を掉りつゝ躍り上れり。遊の面白くして暮るゝ頃まで寒風に耳と鼻とを赤くし、手を凍らせ、其凍りたる片手は懷の中に、片手は紙鳶と其糸枠とを持ちて、吾は家に歸れり。村の人々數多我家を訪づれ居るに、何事にやと訝りつゝ、村人の云ふを聞くに、さては吾弟は死して生れしかと吾はおどろきぬ。姉上

に問へば、唯だ、汝はよき兒ぞ、夕食をたうべて早々いねよ、明日は學校を休ません程にと云ひ玉ふ。吾はその何故たるを知らねど、やがて打ち臥せば、間もなく睡に入りぬ。

明る日は學校を休めよと姉上ののたまひしも宜なりき。此世に一時の生をも得ざりき我弟は、我家の塋域に埋められぬ。

其日二人の健脚なる村人、九里程隔たりたる姫路にとて急ぎ行きぬ。我は其如何なる事ありてかを知らねど、今日は姉上とも語るひまなく、我父上も已が定めの坐に居たまふ事はなかりき。其日は數多の醫師來りて、吾母の臥し玉ふ部屋の方に行き玉ふを見き。暮るゝ頃さきの村人馳歸りて、院長の君の明朝早くかなたを立出で玉ふよし、語りけるに、我はかたへ聽つゝいたく驚ろきぬ。其夜は常の如くに臥床に入りしが、不意に吾耳もとに鐘のなる如き響しぬと思ひて目をひらきつ、吾臥したる一室に續きたるかなたを見やれば、行燈の光おくらきもとに、長き火鉢にかけたる鐵瓶の湯のたぎる音して、此火鉢を擁して對坐せる二人の女性あり。物憂げに靜かに打語らへるを誰ぞと見れば、吾姉上と前にいへるかの媼となり。姉上よと聲かくれば目覺しか、靜かにせよや、母上の目を覺し玉はん程にと云ひつゝ、吾方に馳せ來りて、吾をなぐさめ玉ふに、吾はいつしか又睡りに入りぬ。

明る日の十時頃なりけん、姫路病院の長なる醫師の我母の病室に行き玉ふを見たることのみ、かすかに吾が記臆の底に殘れるなり。又其日坐敷の一間に七八人の醫師と、かの院長の君とを吾父上の饗應し玉ひきをかすかに記せるのみ。

其より母上の病少しくおこたりぬとて、起て坐し玉ふを見て、家の人々皆少しく心を休めつ。其明る日の事なりき、今日は氣分殊によし、妹を見たしと云ひ玉

ふに、其頃わづかに二歳の冬に逢へる吾妹の、母上病み玉へばとて、母上の兼て愛し玉へる、一人の婢がもとにあづけたりしかば、下女は急ぎて出で行きぬ。やがてかの婢妹を抱きて來つ。其時吾も共に母上の病室に入りぬ。此時母上は打臥し玉ひしが、汝はよき兒ぞ、此方に來よとて、かの婢には笑もてゑしやくしつ、我妹をば已が方に抱きよせて、頰のあたりに接吻し、吾にも來よとて、己が枕頭にありし菓子を取り、吾に與へ玉ひ、我頭を撫し、さて云ひ玉ふ、吾がやがてよくなりなば、汝も共に抱きてねさせん程に、無理を云ふことなくして、日々學校に行けよ、賢き人となれよ、小さき妹を愛せよ、吾は正月には起き出でゝ、汝と妹によき衣服を着せ、甘き雜煮を食はしめ、姉上と此婢と共に歌留多をも弄ばん、吾は此時母上の目の潤ひて、頰に走れる數行の涙を見き。吾は何心なく聲揚げて泣きぬ。妹も亦た泣きぬ。母上は、なきなせそ、吾は直によくならん程にと吾を慰め玉ゐぬ。姉上と二人の婢とは亦た吾等二人を泣かしめざらんとあせりつ。

明る日は今日は學校に行かんとて吾は出で行きぬ。學校に行けば母上をも打忘れて、例の如くに戲れまたは學べり。一時間後の遊歩をおへて、次の學に入らんとしつる頃なりけん、我家の下女は吾を迎へにとて急ぎ來りぬ。學校の師の我家の下女に病める人は如何にかと聞き玉ふに、病いと革まりはべりと語れるを吾は聞きぬ。下女は吾が後に從ひて、吾をばうながしつゝ、走り來て、小川の板橋をば打渡らんとせり。此年は寒さ殊にはげしくして、堤の上より橋の上は云ふまでもあらず、白きまでにおける霜いと厚くて、橋板凍りてありければ、橋の上をな急ぎ玉ひそ、すべり玉はん程にと下女の云ふに、二人はゑづかに橋の上を行く。折しも冬の小川に氷魚すくはんとて、此冬の朝げにも、川のふかみにたちて、大なる球網と細長き逐ひ竿とを

持てる二人の男あり。吾はそを興ある事におもひつ、橋の縁に兩手をかけて跪きぬ。歸り玉へよと下女云へば、かれらの一球すくふを見ずやと吾答ふ。やがて上の方より此方に逐ひつゝ、此方の球を舉ぐれば、球に入れる氷魚は其底白きまでなりき。下女はさすがに心のせかるゝか、吾を捕へて引立てんとす。さなせそ、吾は今一度見んとすなり。下女は云ふ、さらば妾は獨り歸り侍らん程にと。かく云ひつゝかれは橋のかなたに行かんとす、されど吾は動く可くもあらず。かれ又わが傍に來りて、母上の君をまち玉へば、疾く〳〵歸り玉はずやと云ふ。此時またかの二人は數多の魚をばすくひ上げつ。よし、今は行かんと、立ちて再び川の方を見たるに、大なる鼬の岸の内にひそめる魚を捕へんとて、岸の水に接せるあたりを馳せ居たり。吾は其れをば見んとて、また元の處に跪きぬ。かの鼬さと水に入るよと見へしが、氷魚あまた群をなして、水底の岸の穴より逃げ出でぬ。前の二人は直にそを逐ひて、また幾多の氷魚を得たり。其樣の面白ければ吾は歸らんとも思はず。下女は幾度ともなく、あるいは賺し、あるひは嚇し、またはいつはりて怒りなどすれど、吾はなほ歸らんとはせざりき。此時橋のかなたに走り來れる一人の男あり、正しく吾家の下男なりき。かれは走り來たりて、何をかなし玉へる、早く歸り玉はずやといふ聲さへ震るひぬ。彼は吾をば背に負ひつゝ下女を叱して云ふ、汝は吾家の女主の絆切れ玉ひしに、何と云ひて罪を謝せんとするぞ。下女は答ふるところなかりきが、其時袖もて顏を掩へるを見つ。

急ぎ歸りて見れば、家の人々皆あはてふためきて、心も此處にあらぬ樣なり。吾は母上の病室に入りぬ。皆打しめりて泣きあへるなり。昨夜々道を踏んで已が姉を見んとて吾家に來玉ひたる、吾叔父上もいませり。父上、兄上、姉上も皆な、亡き母上の枕頭に集ひ玉ふ

なり。袖を志ぼりて泣き玉へりし姉上は、吾が入り來るを見て、直に吾手を取り、母上の顔掩ひたる白き布を取りて、よく母上の面を記せよ、母上は已に此世の人にあらじをと云ひ玉ふ、吾は母上を見れど、母上は最早や吾を見玉はず、まして微笑み玉ふことおや。二人の媼を始とし、兼てより我母上の心許し玉ひし吾が隣家の主婦も、其他四五の人々も、皆此室にありて泣けり。わが少さき妹は如何に？かれは泣きつゝある媼が膝にありて、手を拍ち、歌をうたひ、且つ聲をたかめて打笑へり。此時吾は如何なる感をか起せし？今は只だ少しも悲しからざりしかど、人の泣を見て、吾も聲を放ちて泣きしを知るのみ。

其明る日なりけん、父上、叔父上、姉上の三人は共に白衣を着け、なはの帶して、姉上は燭をとり玉ひ、父上と叔父上とは共に吾亡き母をゆくわん（死したる人をあらひ且つ頭髮をけづるなり）し玉ひし事、吾のそを見んとして、叔父上のかなたに行けよ、兒の來べきところにあらじと云ひ玉ひし事。村の主婦たち數多來りて我家の爲に助力せしこと。庭の大なる鍋には火盛にもえて、やがて釜の底に焦げて殘れる飯の村の兒等の袂を重くせし事。此日の混雜にまぎれて舂きたる米をば袂に滿たせて持ち去りし、心まがりたる婦ありし事。または我學校の師のわが家の玄關に立ちて、葬送の順序をば聲高く讀み玉ひし事。吾白き衣服つけて、從弟なる兒と共に、亡き母を入れたる棺の下を歩みし事。寺の法師の法衣が燦爛として目を射し事。山のふもとに穿ちたる火葬の火にかざりたる棺を引れしと。其夜は吾母を看護せしかの媼と共に寢ねたれど、さわがしさに幾度か夢を破りし事。三四日經て後、親戚の人も歸り、またかの媼も歸りさりたる夜のさびしさ、身にしみておぼへたる事。是等は皆我記憶に殘るところなれど、たゞ惜むらくは、斷續して次第をなさず。』

是にもましてなほ惜しきは、吾母上のおもかげなり。今となりては其面影遂に吾が記臆の内にあらず、吾が記して忘れずとおぼゆるは、其額邊に豆大の黒子のありし事と、其丈のいとひくかりし事との只二つのみ。」其もことはりならずや、吾母上の亡き人の數に入り玉ひしは今より殆んど、十五年の昔、明治十二年の冬十二月念四といふ日なりしを思へば。

征清の途に上るとき、たらちねの送り玉ひし寫眞を拜して

近衛師團　松　琴　生

いのち惜しむなおくるなと　たふとき教へもろともに
おくりたまひしたらちねの　情けをこめしこの寫眞」
故郷をいでゝはるばると　かぞへし月日とくすぎて
こゝに三とせの秋のくれ　拜むもうれし父の顔」
寄せてかへらぬ年の瀬の　むかしにかはる其すがた
うなじに雪は降りそへて　ひたへに浪は打よせぬ」
うれひがちなるその目元　さびしく見るくちびるの
やつれしかげは親思ふ　心にまさるおやごゝろ」
わか行末を心して　教へたまへしいく言も
叱りたまへし其時も　胸にありあり浮ぶなり」
海にたとへん海淺し　山にたぐへん山低し
げにかぎりなきみめぐみの　心の底に志むるなり」
八重の白くもへだてつる　遠きあなたのたらちねに
何を志をりに盡さなん　思ふばかりぞ誠なる」
教へかしこみ君の爲め　國のみためにもろこしの
野邊にいさほを立てゝこそ　深きめぐみも報ひなん」
みだるゝおもひ忍ぶれど　せきくるなみだ止まらず
また拜むなるみすがたを　おしやけがせし一雫」

子供の時刻

松が枝女譯

(1)
晝より夜のうつりぎわ　入相告ぐる鐘の音に
その日の仕事終りつゝ　一息やすむその時ぞ
子供の時刻と知れたり

(2)
我が居し上の小ざしきに　小さき歩み音すよと
思ふ間もなく聞えけり　開かれにける戶の音と
淸くやさしき聲々と

(3)
燈火あかき書齋より　見ばまじめのアレースと
笑ふアレグラその次は　黄金の髮のエデースが
手に手取つゝしたく／＼と　廣間のはしご下るなり」

(4)
さゝやきぬよと思ひしが　又聲消えて靜かなり
されど樂しきまなざしに　その計畧は讀まれけり
相計らいてわが身をば　不意に討たんと企つる

(5)
俄かの走り階子より　にはかの襲ひ廊下より
守手あらぬ三つの戶を　心得がほに突き入りて
わが城內に押しよせぬ

(6)
あるは腕にとりすがり　あるは椅子よりよぢ登り
わが身の塔を圍みけり　よし逭れんとなすとても
のがるゝ隙のなきほどに　かたくわれをば取まきぬ

(7)
小き六つのかひなもて　わがうなじをば抱しめつ
飽くまでキスに醉しめぬ　ライン河畔のマセ塔の
ベンジン君を思ふまで

(8)
まなこすゞしき賊たちよ　この城うちに入るからは
かく年老けし鬚づらも　いましら三人に敵せぬと
思ふ心かあなをかし

(9)
砦のうちにいましらを　かたくとざして何處にも
はなれしめまじ心なる　囹圄の中に押し入れて
いく底ふかく押し入れて

(10)
そこに幾千代秘め置かん　幾千代ながく秘め置かん
肉の砦のやれ果てゝ　この世の光りあとになし
もと來し塵に歸るまで

史談

本編は曩に文藝欄内に掲げたりしも、編輯の都合により史談欄内に移せり。看官諒せよ。　編輯者識す

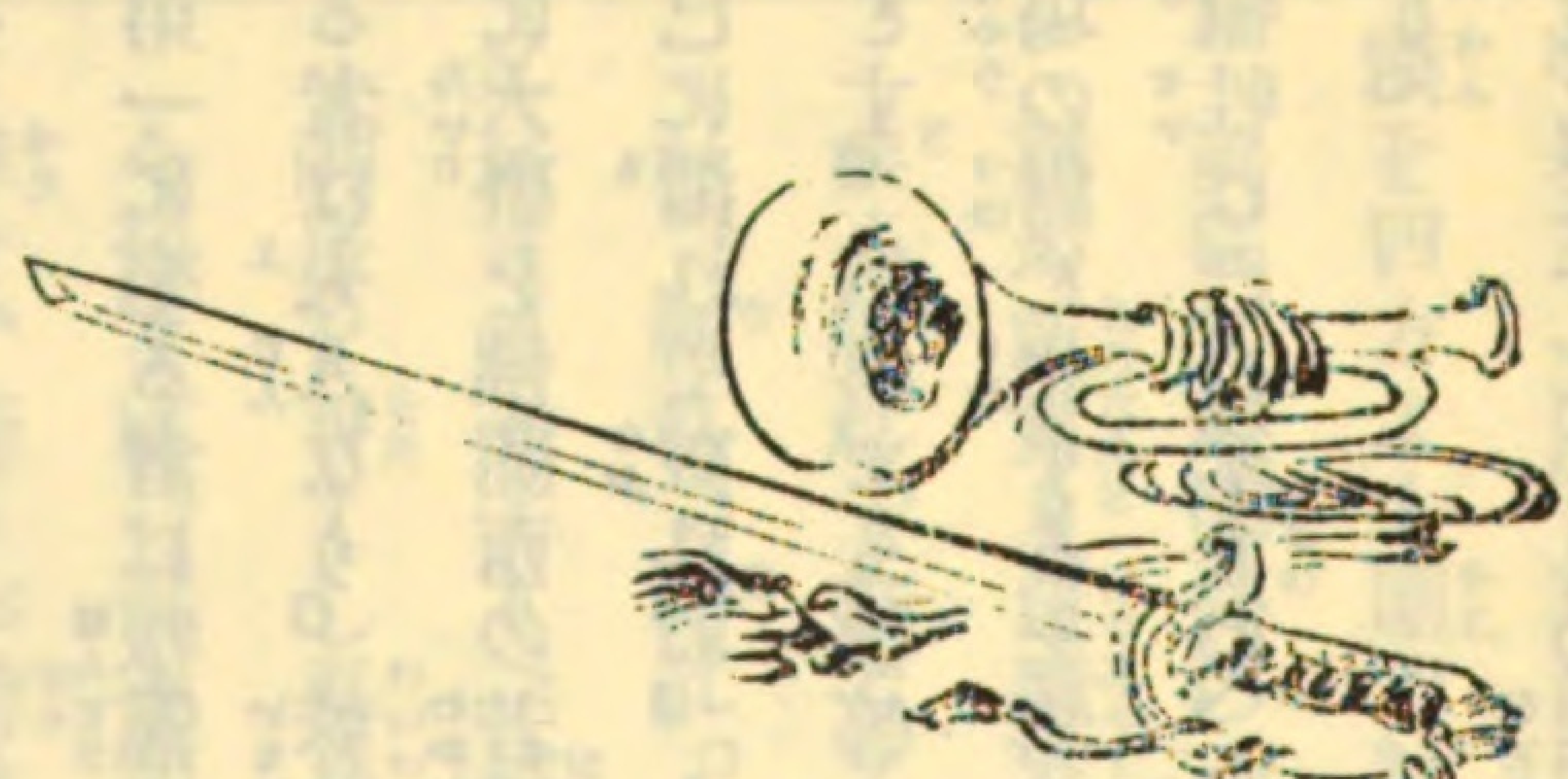
つれなき命（下）

若武者來つて營を佛蘭西軍の本營に傳ふれば、非常喇叭忽ち響きて一呼吸の間に隊伍整ひ、軍艦よりも水兵を揚げて、一時間足らずの間に叛黨の巨魁たる西班牙貴族の一門老幼殘りなく佛軍の手に搦められ、あとは傾く月に園生の芝を赤く染めなして斃れし死骸三つ四つ二つ。虫の音細りて夜は何時しか明なむとす。

＊　＊　＊

曉かけて軍法會議開かれたり。容易ならぬ叛人なれば、一門斬罪とは定まりぬ。但一名は助けらるゝ代りに、劊手を務むる事を命ぜらる。此悲しき務は、一門の願によりて長男某之に當る事とぞ聞へし。

＊　＊　＊



佛蘭西軍の本營を逈か下に見て、叛黨の巨魁たる西班牙貴族の屋敷と谷一とつ隔てたる高みの原は、刑場と定められ、警護の兵士數十人銃を提げ劍を帶して非常を戒しめたり。

朝日美はしくさし上りぬ。原上の草は一面に金露をつけたり。海風はヒヤリ〳〵面を吹けり。千里一碧の太西洋は新に函を開きたる鏡の如く足下に横はれり。清鮮高潔なる自然は、思まゝに其清鮮高潔の装を凝せり、宛なから人間の憐れむ可きを故らに示さんとするかの如く。

＊　＊　＊　＊

朝日三竿に上る頃、戞々たる馬蹄の響聞へて、佛蘭西軍の主將は麾下の士を率ひて刑場に來りぬ。刑場の用意は已に整へり。今は犧牲の來るを待つばかりなり。須臾に一群の人は刑場を指して蛇行し來れり。是れ犧牲なりき。

彼等は一列になりて、銃劍を提げたる兵士に左右を圍まれて來れり。眞先に來る者は、年の頃六十あまり、老ひたれ共身材長大、眼光炯々として白髮白鬚の面に氣高くも亦逞しき相あり。彼は確かなる歩武を以て、草の葉に置く露を八方に蹴散らして來れり。次ぎに來る者は、五十あまりの婦人なり。やゝ窶れたれ共、優美にして品高き其風采擧動は、今臨終の其際までも著しく見はれぬ。次ぎに來る者は、絶世の佳人なりき。彼女は十九か未だ廿を越へざる可しと思はれぬ。彼女は花の如く美はしく風の如く淸し。彼女は手に十二ばかりの乙女をひきて、結婚の式場に上るが如くに勇ましく歩めり。彼女の双眼は星の如く輝やけり。前には淚ありしならむも、今は雨後の星の如くに輝やけり。

第一に來る者は叛黨の巨魁西班牙貴族某なり。次に來る者は夫人なり。妹の手を曳きて來る者は、蜜柑樹下に大事を佛蘭西の若武者に漏らせし彼少女なりき。事已に漏れて破れぬ。今や彼等は共に同じ運命に就かむとす。然れども彼等はまた之を顧みず。共に同じく刑場の露と化するを喜ぶなり。

犧牲は已に來りぬ、最後より更らに大なる犧牲は來れり。

彼は三十ばかりの男なりき。彼は魁梧の男なりき。然も其意氣は沈み、力は失せ、悄々として頭を垂れて歩み居るなり。彼は父の命により母の命により妹の願により、其至親至愛の者を刎ぬるの劊手となつて、一家

の血脈を維持す可きつれなき運命に會せる長男なりき。

＊　＊　＊

一群の犧牲は悲む可き團欒を草の上になしぬ。撿分の主將は其位置を取り、警護の兵士は更に緊しく四方を固めたり。時は刻々縮まりぬ。原上の草はフラ／＼海風に躍りて、一雙の黃蝶面白げに飛び、空の碧りは海の碧りに映じ、波は面白く斷崖の下に歌へり。

時は迫りぬ。

佛將は時計を眺めて、兵士に命じて一振の長劍を劊手たる可き貴族の長男に渡さしめぬ。

劍、手に至つて、彼が顏は坐したる草の色よりも蒼くなれり。

＊　＊　＊

太陽は上より見、見へざる天使は空より見、空は上より見、海は下より見、寸々の草皆足を踏て丶見、蝴蝶は舞いつ丶見、佛將は時計を手にして見、幾多の兵士は八方より見る其中央に、悲痛腸斷の慘劇は行はれたり。

唯見る、頭を垂れ眼を閉ぢ脣震ひ身戰く魁梧の一壯漢を四方より圍でむ勵ます父、母、妹、幼なき妹。

汝は父が臨終の命を聽かざるか。汝今此に死なば、誰が此貴き血脈を嗣ぐ者ぞ。父は汝に命ず、斬れ、疾く斬れ。斯くても斬らざるか。父が言は聽かざるか。斬れ、斬れ。父が臨終の願、斬れ、疾く斬れ。

父が言の下より、母もまた淚ながらに

御身を育てし吾身、斬り兼ぬるは其筈なれど、御身今死なば、父上の家も志も誰れかつぐ可き。斬るが孝ぞ、斬るが情けぞ。いざ疾く。

兄の頸に抱きつきて促す幼なき妹

兄上、疾く斬りて……妹は父上母上と天にて兄上を待ち參らせむ。

妹は涙拂ひて、滿面に笑を湛へ、兄の手を取り動かし

いざ兄上、妹が一生の願、疾く斬りて天に往かせ玉まへ、氣をふりおこしていざ疾く……かねての勇氣にも似ず兄上。

四方より取り縋がられて、六尺の丈夫も唯ビリ／＼と震ふばかり。

時計手にしたる佛將は屹と立上り、聲ふり絞り、

時刻移つるぞ。然らば盡く兵士に命じて打ち果さす可きか。

聲の下に、憐れむ可き男を繞りて涙は雨の如く降り、念じ祈る聲は嵐の如く湧きぬ。

疾くせよ、斬れ、父が言ぞ、父が賴ぞ……御身を生みし母が願……兄上疾く／＼……兄樣はやく

＊　＊　＊　＊

今は思ひ切りて、蹌踉めく足踏しめ、わなゝく手に劍を取つて夢の如く立上れば、花を欺く妹は眞先きに躍り出で、兄が劔の下に立ち、聲も涼しく

兄上、能くぞ勇み玉ひし。イザ、平生の仲好き甲斐に、此妹より始め玉へ。殘りて血を見る勇氣なければ、イザ疾く／＼此妹より。

鬼を拉かむ警護の武士も、悄然として鳴りを靜めぬ。忽ち走せ來る人影。手をあげて「暫」と呼ぶ聲。誰も彼も一齊に彼方を顧みる。

草を蹴て走せ來るは、誰ぞ。髪は金を飛ばし白き面は紅を帶ぶ年少優美の若武者。密柑樹下に立ちし武夫。

彼は走つてまさに刀下の露と消なむとする少女の傍らに近寄り、聲をひそめて囁きぬ。

御身が昨夜の厚恩、言葉に謝す可き樣なし。如何にもして御一門の生命を救ひ參らせむと骨折りたれど詮なし。唯某は逸早く本營に警報したるの賞として、御身を請ひ受けたり。御身若し厭はずば、死を

免がれて、共に某と住み玉はんや。

少女の氣色は見る〳〵變はりぬ。凄まじき怒は面に溢れたり。少女は一言の答もなく、惘として立てる兄の衣の裾を曳き動かして

イザ兄上、時刻移つるに、疾く。

瞑目して震ふ〳〵振り上げ振り下ろす刀下の風に、紅血サット迸りて、あはれ、無双の花は散りぬ。

※　※　※　※

姉の無慘の態に思はず面の色を變へし幼なき妹も、思ひかへして、打笑みて兄の刀の下に斃れぬ。

妹二人の血に滴る刀提げて夢心地に彳む吾子を、白髪の父は呼び勵ましつゝ、同じく刀の銹となりぬ。

※　※　※　※

花よりも美はしき妹を斬り、蝶の如く無心なる幼妹を手にかけ、白髪の父に刀を當て、微かに眼を開けば、映つるは、刀の下に坐して吾を見上ぐる母の笑顔！

刀提げて枯木の如く突立ち、進みもやらず、退きもやらず、物も言はず、色もなく息もなき吾子を見やりて

御身怯れしか、父の待玉はむに、御身が妹の待ち居らむに、疾く斬らずや、遠からず逢ふ可きものを、何故に怯れしぞ、いざ疾く。

持ちし刀は千鈞の重きよりも重く、聽きし言葉はトレドの劍よりも肝にこたへ、唯ひた震ひに震ふ吾子を屹と見て、母夫人は突と立ち上り、叫ぶ間もなく、留むる間もなく、千仭の斷岸を目がけて走り出でぬ。

一飛！閃く衣影！

一齊にアット叫ぶ聲！

人の倒るゝ物音！

立ち騒ぐ人影、水を呼ぶ聲！

※　※　※　※　※

恩を斬り愛を斬りつれなき生命を永らふる運命を負は

されし彼は、氣絶より蘇りぬ。然も彼は已に生ける死骸なりき。憔悴、枯槁、面は土の如く、相は夢の如く、其心には唯過ぎにし無慘の記憶のみ存し、其眼は絶へず遠からず逢はむ人々をのみ望む無言無笑無望の生ける死骸を見る人毎に、之を呼びてつれなき生命の像となしぬ。(完)

毀れ茶碗。

無一生

今は昔十八世紀の頃ひ佛蘭西にて尼法師等より組織されたる仁慈を旨義とせる慈善會の一人の尼法師の負傷して危篤に迫れる一人の病兵の看護に從事してありけるが陣營の生活戰爭の亂雜に馴れたる件の病兵は看護てふ神聖なる職務及び尼法師なる恩人の忠實なるとに對して毫も尊敬を表せざりき去れば件の病兵は毎度尼法師の親切なる救護を無情拒絶しマタ時としては尼法師に對して無禮なる言動をなしけるが可憐の尼法師は何時も變らさる忍耐を以て病兵の無禮に答へ居たりけり

件の病兵が一際病苦に惱み居たりし一日のと彼の尼法師は醫師の處方に依りて配劑されたる水藥の茶碗を甲斐々々しく手に携へて病卒の枕頭に入り來り卒とはかりに水藥を進めけるに病卒は却々に水藥を服用せんとせず尼法師は是非に服藥せよとて慇懃に病兵に迫りけるが病兵は最初は單に拒絶するのみなりしが中ごろにして無禮なる暴言を吐き果ては終に尼法師を恐嚇するに至りけるが尼法師は情強くして服藥を拒絶するの結果は一命を危くするに立至るへければ其邊等を篤と勘考して服藥してよと切に乞ふて止まさりしが病卒は果てしなき尼法師との押問答を蒼蠅きとに思ひ早くコノ場の埒を明けんと思ふものから尼法師の勸告に從ふ素

振に見せ掛け今しも面前に差出されたる茶碗を手に取上ぐるよと見へけるが茶碗の中なる水藥をは尼法師の面に注ぎ掛けゝり

當下敬虔なる尼法師は更らに咳きもせす其場を立去りけるが稍暫時過きて尼法師は更らに調合したる水藥を携へて病兵の枕頭に立現はれけるが不屈不撓の尼法師を病兵は偖ても尼法師の强情さよと憤怒に得堪えす茶碗を引ッ攫み骨灰微塵となしけるが藥液は仁慈ある尼法師の衣裳に迸りけり夫は偖置病兵は斯迄に辱めたれは今日に懲りて向後再ひ尼法師の吾傍に來るとなかるへしと信じ居たりきなれども病兵は戰場にて現はすへき勇氣あるを知りて宗敎が與へ得る勇氣を知らさりき

尼法師は第三回目に病兵の枕頭に來り病兵に打向ひ「何卒コノ水藥を服し玉へ何卒妾の願意を叶へ玉へよ」と玆に於て流石に猛き壯夫も慈悲忍辱を旨とせる尼法師の仁慈の言葉に精神恍惚として心の角も折れ吾れにもあらで感に入り時ならぬ泪の雨を催しけるが病兵は「御身は天女なり」と叫ひ而して彼の健康に補益ある藥液を取上げ毫も遲疑せす飮了れり

病兵は吾が怨敵の如く待遇したる尼法師の敬虔なる熱心のために其一命を救ひ得たり彼は皇天のコノ冥助を感謝し而して一方に於ては彼樣に温和なると同時に一方に於ては彼樣に高尚なる德操を感得せしむるところの宗敎を一層能く極めたしとの志望を現はせり

雜錄

最近社會思想一斑

●●●●●●●●●●●●

◉何故に我は淸に勝てりや（國民之友第二百四十號社說）

徒らに戰勝を說くは是れ國民を驕らしむるものゝみ、戰勝の因つて來る所を論じて將來を警誡するは是れ國

民をして自ら省みしむるものなり、何故に我は淸に勝てるやを知るは即ち我をして長く其勝を保存せしむる所以なりとて、地勢、歷史、敎育、兵制の四者を重もなる原因となせり、

(一)地勢　自然は日本が自ら一大國民たるを覺悟して、世界的運命を試むるまで、大平洋を以て東南の範離とし、日本海を以て西北の限界とし、以て一國民たる特性を養はしめたり、

(二)歷史　恥辱の感は未だ嘗て恥辱を經驗したるとなき者に於て最も鋭し、敗北の歷史を有せざる日本人種に取つては、敗北は自殺よりも痛酷なる者なり、吾人は一歩退かんよりは寧ろ一斗の血を流さんとを欲す、

(三)敎育　維新後統一の敎育令に因つて訓練せられたる新日本の青年こそ即ち征淸の兵士なれ、彼等は徒らに命令の下に驅使せらるゝものにあらず彼等は自ら戰の目的を解し、喜んで其任務を盡さんとする者なり、彼等は護國の義務を解し、國家の榮辱を解する者なり、彼等は日本の利害を以て其心とする者なり、

(四)兵制　徵兵令は日本の平民をして盡く武士的の訓練を受けしめたり、昔し士族の特長として誇りたる武士道は徵兵令に因つて平民の間に浸染せり、槍を執つて敵陣に馳突し、主君の馬前に死するとを以て唯武士の事となしたる平民は、彼等も亦同じ任務を有するとを感じたり

之を要するに日本は、天然に助けられ、歷史に助けられ、文明に助けられたり、天然と歷史とは、過去と今日の用を爲せり、文明は、今日と未來の用を爲さんとす、吾人は日本の勝利をして長く失はざらしむるの道、實に此に在りと信ず、

◉女學の宿弊(婦女雜誌第廿二號大林弘一郞氏)

其の大要は左の數項より起れるが多きものゝ如し。

(一)女子の性質は槪して大躰を達觀するの識力に乏

し。故に見識立ち難し。
(二)性緻密を好むが故に、科學の研究を事とし、要領を得ること難し。
(三)柔弱にして多情なるが爲に、理義を失ふこと多し。
(四)才智の敏捷なるが爲に、學問の應用を誤ること多し。
(五)器局の狹小なるが爲に、行義を誤ること多し。
(一)は讀んで字の如し、(二)も大概(一)と類似の傾向を指したるものにて分斷に長じ綜合に短なることなり、(三)と(五)も類似の點にして前者は識見に關し、後者は實行に關す、(四)は才智敏捷なるが故に、目前を胡麻化すこと多く、學問を胡麻化して應用(寧ろ濫用)すること多きを謂ふなり、
この論の目的は固より弊のみを擧ぐるに在り、弊の裏には利の存すること言ふまでもなし、

◉**悲哀の美と女性**（女學雜誌第四百四號、布川靜淵氏）

女性は何故に悲哀の美を快感すること少なきか、
女性は實情を起し易きが故に、美假情を形造ること少なし、是れ理由の一、
女性は概して敎育の程度低きが故に、抽象的の作用鈍き者なり、是れ理由の二、
女性は外美を重んずるの習慣あるが故に、實情と假情とを錯誤し易し、是れ理由の三、
女性は感動すること深き割合に、之を現實に行爲するの術に乏し（古來一家の主人たりしこと少なき故に）、是れ理由の四、
女性の境遇は變化少なし、從て執着心強く保守性なり、是れ理由の五、
第三の理由は略ゝ第一の理由と同じく、實情をも假情の如くに輕く淺く感じて、世辭巧みに色麗しく僞善に流るゝことあると同時に、假情をも實情と混淆して、善

入を扮する俳優は實際も善人なるべく惡人を扮する俳優は實際も惡人なるべしと思ふ如き傾向あるを謂ふなり、

第五の理由は境遇の變化少なきが故に經驗少なく、實際に於ても悲哀の大小輕重を對照し難きと同時に、假情に於ても悲哀の大小輕重が明瞭ならぬを謂ふなり、

⑤**歴史畵の効力**（繪畵叢談第九十四卷、論説）

年中行事畵卷の儀容典禮の一部を見るに足り、後三年軍記の奥羽追討の一事を知るに足り、榮花物語繪の藤氏專權時代の一事を窺がふに足り、蒙古襲來の繪詞の竹崎一家の軍功を察するに足るの類、繪畵の史學上に効力あると尠からざるを證す、而して宗教家は夙に繪畵の能く人心を感動せしむるの効力あるを知り、之を以て信仰の觀念を鞏固にするの手段となせり、圓光大師の繪傳、一遍上人の繪詞、弘法大師の行狀記、親鸞上人の繪詞傳の如き有名の畵數種あるが上に、緣起繪と稱するものも亦其類に乏しからず、然るに史家の茲に考へ及べるもの少なく、繪畵の効力を藉るの意なかりしは惜むべきなり云々、

⑥**信仰上の經驗**（同志社文學第八十二號、小崎弘道）

先づ形式的智識、蓋然的智識、實驗的智識を論列し、其結末に曰く、

古より世に大波瀾を起したるものは必ず新しき眞理を發見したるものに非るはなし一人二人三人にても可なり能く其心中に大眞理を實驗して何處迄も貫徹せしむるの氣力なかる可らず人哲學を講じて反覆同じきことを二三回すれば之を聞くもの必ず飽厭するに至らん然れども實驗を以て得たるものは其勢猛く其力大にして彼弟子等の基督に就き幾度同一事を聞きしに係らず深く感動したるが如く說く毎に感激去る能はざらしむるものあるや必せり吾人今日要する所のもの即ち之なり眞實の知識にてあらんには之を

一百度二百度も繰返して止まざるの勇氣を生ず可し希くは吾黨は此大なる單純なる確信を握取して以て吾人の大旗章となし日本に驅馳する可ならずや否らざれば決して吾人の愛する同胞を感動すること能はざるなり而して此確信は形式的蓋然的の知識に由りて得らる可きものに非ず唯眞實無二なる實驗に由りて來れる知識にのみ由りて之を得可きなり

◉農業の愉快（興農雑誌第二號社説）

其要旨に曰く、

元來農業とて單に米麥蔬菜を作るのみが本旨にもあるまじければ果樹を植へ養禽、養蜂及養豚をなし、又草花等を植へ自家に之を用ゐたる餘には悉とく市塲に出して販賣すべし

果樹の如きは單に其花を開き、實を結ぶを見るだにも一の快樂なるに況して此果を食ひ此菓を賣つて利益を得るは更に一段の樂しみなり家禽の晨を告げ友をよび呱々穀を啄ばみて庭に戯むるゝを見、蜂の王あり勞者あり番卒あり互に相守り相勤めて社會的組織をなし且豫かじめ備へて未來の用意するを見るも面白し草花に至りては青黄、赤白相交はり、淡裝濃抹、相映じ四季觀を絶たず誠に天の妙技なり

◉煉乳分拆表（農事新報第七十四號）

煉乳は嬰兒滋養料なるか故我國に輸入する種類も亦尠なからず、今左に世界知名の會社製造に係る百分比例を掲けて滋養の眞價を示さん

製造所の名稱	水分	鹽分	脂肪	蛋白質	乳糖	白糖
米國煉乳會社	二七、七二	一、八一	八、六一	九、九二	五一、〇〇	八四、〇〇
アングロ、スウイス社	二三、四八	二、一〇	九、七〇	一一、三五	一一、九五	四一、四一
チストリヤ煉乳會社	二四、二六	二、一六	九、六三	一一、八二	三五、〇〇	一三、〇〇
ゲルベル會社	二六、〇五	一、八九	一〇、四三	一三、四六	一一、〇四	三八、一四
フークル氏乳酪乳汁會社	二五、五六	一、八七	九、九〇	一三、三九	一〇、一八	四〇、一〇
以國煉乳會社	二五、二一	二、〇三	九、二一	一四、五五	一三、四三	三五、四八
ケペル兄弟	三一、三〇	二、五六	一〇、一九	一三、五三	四三、〇〇	四三、〇〇
チストル	二四、七五	二、一七	一一、五三	一三、六七	一一、一九	三三、六九
ニユヨーク煉乳會社	二五、四三	一、八九	七、〇一	一一、二四	一〇、一一	四三、三三
ノルウエー煉乳會社	三三、八〇	三、〇一	九、八〇	一三、一三	四一、〇〇	三五、〇〇

山嶺探撿の發達(二)

然れども、今日開明進步の民族と稱せらるゝ吾人に在りては、如斯き幽妙なる畏怖心は組織ある山嶺探撿の起りし以前已に消亡したるは前に云へるが如し。アルプス山中の行路は疾やく太古に於て開通せられ。モトラスカン人が青銅器を攜へ行きて、バルチック海より產する琥珀と交換したるは、實にアルプス山中の一路を借りたるものなり。是れ全く歷史以前の事にして、當時ゴールに達するの行路(恐くは是れサン、ベルナーの行路)も亦開通しありしなり。

ブレンチルの行路は、中古の時代に於ては殊に帝王の行路として知られ。サン、ベルナーの行路は、多く西方歐羅巴より來る巡禮者、若しくは遍歷者の依りし所なりき。又ペンナイン、ジヨヴ山中の異教徒の祭壇は昔時基督教徒の爲めに破壞せられしも、其の以後屢ゝ改造せられて、今日迄持續せらる。此處を通過したるアボットラッドルフ、セント、トロンド(千百二十八年十二月)、基督教の僧侶ジヨン、デ、ブレンブル(千百八十八年二月)等の旅行記は、ターリッチの『瑞土旅行』と題する書に於て讀むことを得。今ビショプ、スタッブスが、此書中より其著『中世及近世歷史講義』に譯載したる一節を左に錄せん。

余が打絕て無音なりしを寬宥せよ。余はジヨヴの山中にありて、一方峰嶺にいと近き天を見上げ、一方には地獄とも想はるゝ深谷を臨みて慄き。身自ら天に近き處にありて、己が祈禱の聲は、必ず神の聞き取り玉ふべしとの感に堪へざりき。余は此時「神よ、余をして、此苦痛の場所に來る勿れと諗けん爲に、吾兄弟の下に歸らしめよ」と叫びぬ。苦痛の場所とは眞のことなり。此處には巖石のみ多くありて、一面氷を以て布き詰められ、語るもをかしきことながら、

滑り易くして殆んど立つと能はず。到底御身等が安全に歩を入るゝの地にあらず。若し入らば、死を招くは必定にて、死の危機に遭遇するは其度數（難たかるべし。余は御身等に、一字にても書き送らんと、幾度か荷袋の中に手を置きて、インキ壺を引出し看れば、壺中は唯石の如く堅まりたる氷塊にしてペンを濕ほす一滴だに見出すと能はず。余の髯は、霜に凍りて針にも比すべく。余が呼吸する氣は、忽ち長き氷柱と變りぬ。余は遂に何事も書くこと叶はざりき。

十二世紀に於て、山嶺探撿の時運未だ來らざりしは明瞭なり。山中の行路か、斯る恐怖に伴はれたる時代にありては、吾人が峯嶺に接邇する能はざりしも、亦無理にあらず。然れども當時既に好奇心に富めるものか、登山を試みしは、吾人の屢々目撃する所なりき。羅馬のトラヂヤン帝は、朝陽を観んか爲めにエトナ山に登りぬ。ヌーサの側なるロツシ、メロン山（一萬一千六百呎）の絶巓に登るの企圖は、十一世紀に於て剏められ、一千三百五十八年に迨び其企圖遂に成就せられて、斯山の絶巓に會堂を立つるに到れり。十三世紀の末葉、アラゴンのピートル三世は、ピリニース山中の一高峯なるカニグーに登りぬ。「ペトミントン」の山嶺探撿書中之れに關するサー、エフ、ポロツクの一話あり。ピートルは、此時特寵の武士二人を供なひ、總て須要なる準備を整へて發程したりき。此一行は中途にして暴烈なる颪雨に襲はれ、呼吸をも留むる計りの大雷に出合ひければ、二人の武士は猝かに怖氣付き、畏怖と疲勞とに充たされて、直ちに引返しぬ。斯に於て、ピートルはアラ、ツト山上のブライス氏の如く、單身獨往して遂に其絶巓に達したりき。彼は降り來りし時、山の絶頂に一の湖水を見出せしと、之れに石を投じたるに恐ろしきドラゴン忽然として水中より顯出し、空中を

闇となせし程の蒸發氣を吐きて何處へか飛び去りしとに就て、人々に語り聽かしぬ。

一千三百三十九年ペトラークは山頂の形象を觀んが爲めにヴオークルースの傍なるヴエントー山に登りぬ。千四百九十二年佛蘭西のチヤールス八世は侍從に命じて一隊を造り、有名なるエイギユー山に登らしめき。而して彼等は其絶頂を以て慥かに不安心なる箇所と思念したる表徴として、其處に會堂及祭壇を立て、還りぬ。

秋空那處不雄飛

《口繪の繪解き》

曩に黃海々戰の日鷹あり飛んで我が軍艦高千穗の檣上に止まる。水夫之を捕へて大元帥陛下に獻じ、遂に戰塲逸話の一として、綽々閑日月ある軍人の擧措世に語られき。

卷首揭ぐる所の圖は則ち此の高千穗艦上の鷹なり。廣島大本營に於て我が社の米僊久保田氏が一布衣の畫家を以て天顏に咫尺し、親しく命を請けて勅褒の下に揮毫し奉りしもの、縮寫。恰も是れ今日の日本の如くに、『秋空那の處か雄飛せざらん。食に霜禽あり、棲に枝あり。』の意氣あり。

此くの如くにして獲られたるの鷹、今此くの如くにして畫かる。亦雙佳話として傳ふるに足るべし。

家政

家庭の敎育

感覺の敎育（承前）

家庭敎育を常々心に掛くる人々にも、時に忘れ易きは感覺の敎育也。之を忘るゝと忘れざるとは、人をか

たわ者に爲すと爲さゞるとの分け目にして、敎育の中にても殊とに大切なる問題也。

暗黑なる岩窟の中に生育せる魚の目の見へざるとは、屢々聞く所なり、これ目の感覺を發達せしめざるに由るものにして、獨り目に盡ぎらず、耳にても、口にても手にても、發達に心かけざる所は、躰の中にて最も後くれて、片た輪となるべし。婦人にして綿密なる手仕事の出來ざるもの、畫工に育てんとして色取りの分からざるもの、音樂家に育だてんとして聲を聞き分くること出來ざるものは、中には身躰の搆造に不完全なるものもあれども、多くは小さき時より感覺の敎育を誤やまりしに由るもの也。各々の感覺を劣りなく發達せしむるは、例とへば羽と翼を共に育つる如く、羽は翼を助け、翼は羽を助すくる如し、各々の感覺助け合いて初めて完全なる知識を收さめ得べく、始じてめ敎育を受けたる功も顯わるなり。

敎育家の星とも指さゝるゝペスタロツ氏も、感覺の事は非常に重きを置き、『智育は感覺を以て根基とす』と迄でに云へり。故に氏はその敎ゆる所の生徒をして、物を見て智識を開らかさしむるを以て足れりとせず、或は之に觸れしめざるは委わしく之を撿査せしめ、或は之を剖きて原料をしらべしめ、若しくは秤りにかけて重みを測らしむる等、凡ての方法によりて、一物より智識を得せしめたり。幼稚園を參觀し給ふ人々は、保姆が毛糸の球を以て、その色、形狀等を小供に辨別することを敎ゆるを見給ふべし。これ敎育家フローベル氏の感覺力を發育するに基きて考へ出だせし一の方法なり。

かく感覺の發育の必要なるは、古今敎育家の共に主張せる所なるが、感覺の中にも早く發達するものと、遲そきものとありて、一樣に進み難たし、例へば生れ立ての赤ん坊は、未だ見わけも付かず、臭も知らざれど

も、味ふとはとくより知りて、甘からざる飲物は口より出たし、冷めたきものは之を飲まずして、温度適當なる甘味の物のみを求めて之を飲むは、味感の最も早く發達せる一證として見るべし。然れども味感と嗅感とは其の實感覺の中にて最も發育のおそきものにして、聽感の知覺の鋭るときとは、上の二感の比にあらず。

味は時に少しの差を辨じ得ざるとあり、臭ひは度々臭がれざることあり。されど細き音と、低き音と、高き音と、歌のふしの已れに適すると否とのわからざる人は稀れなり。之より多くの人の中には、聽感の意外に不完全なるものもあれども、或る醫師の説によれば、とは小供の時、耳の垢を掃除せざりし結果によるもの甚だ多しと云ふ。かゝる原因より、聽感の鈍ぶれたるものは注意して直す時は、全治することも得べけれども、中には機關の不出來なるものもあり、かゝる者には成る丈け明瞭なる音を以て、ゆる／＼と教ゆるときは、幾分かを直ほし得べし。

少さき子供が未だ搖りかごに臥せしめらるゝ頃にも、已に聽感のみは大に發達して、少さき物の音にもビクリと身を動かすを見るべし、少さく長しては、音樂を喜び、眠むる時に歌を歌ひ或は鳴り物を鳴らすとは最も好むに至るべし。或る富貴の人、赤ん坊の初めて生まれし無經驗のとき、彼が少しの物の音にも驚くを見て、成る丈け驚かさゞらんとを勉とめ、最も靜づかなる一室に置き、保姆にも能く／＼注意せしめて、極めて靜ならしめんことのみ計りしが、今年もはや七才の少年なるに、少しく高き音の爲す時は大聲に叫びて啼き出だし、或は母の袖の下に頭を隱くし、或ひは有り合ふ敷き物に身を隱くして、殆ど痴兒の如くなりと、是れ餘り聽感を刺激せざるになれし過ち也。人はよく喧わがしきに慣るゝものなれば、幼兒の時より漸

々と之れに慣れしむるとは、大切なり、聽感に次ぎて大切に且つ速かなる發達を爲すものは視感なり。海邊に住める漁夫の子は、海上數里先きに魚の群集せるを見出だし、山家の子は土中に埋もれたる筍を易すく見出だすに至る、之れ平常用ゆる事多ければ多き丈けいよ〳〵發育するの證にして、市街に住する者に近眼の多きも又たその反證なるを知るに足らん。世に色盲と云ふ一種の病あり、その者は、赤とか、青とか、黒とかの如き、正色は之を見分くるを得れども、桃色や黃の如き者は之を分かつ事を得ず、薄き色は白と間違へ濃き色は之を黑と間違ゆ、之れ多くは幼時より視力を濫用し、或は視力にかまはざるの結果にして、或の醫師の說によるに、色盲は正當に視力を用ひざるもの十人に對し、機關の不完全なるは僅か一人なりと云へり。視力教育に付き注意すべきは、第一目に付きての衛生を怠らざるにあり。暗らき室にて讀書するが如きものは強よき光線に向かひて物を見るが如きは、最も避くべきとなるが、次ぎには精密に一物を觀察するとを習わしむべし。觀察の大切なるは今更ら云ふ迄もなけれども、全じ一つの書物を見、全じ一つの場所に至るも、一人は之れによりて得る所夥しく一人は僅かに見る所一二に止まるとあり。これ觀察力の如何によるものにして、實に觀察力の多少は、人の一生に大なる利益と損とを與ふるを知らば、教育者の最も能く注意すべき問題ならずや。

かくの如く感覺の教育は、忘するべからざる大切なる問題なれども、專ら之れのみに力を用ゆる時は、又た大なる弊害の生ずるあり。たとへば、音樂の如き耳を喜ばしむるものは之を喜ぶと雖も、歷史の如きは之を捨て丶、化學は之を喜べども、數學は之を喜ばずと云ふが如き、感覺の奴隷となるとあり。元來感覺教育の目的は、ために已れに快樂を與たへ、或は一見して萬事

を見抜き人を懲かしむるがためにあらずして、其の智識を畜へ、其の智力を養成するために、道具の一として之を養ふとなれば、氣儘なる害に落らざるこそ最も注意すべき問題なるなり。

學藝片々

地球の年齡

植物の年齡は幹を切りて知るべし、古人の年齡は歷史を繙きて知るべし、地球の年齡に至りては、繙くべき歷史もなく、切るべき幹もなし。故に古來多くの學者が、己が得手〳〵に隨つて、研究を凝らせしが、各々其見る所一ならず。ウ井リヤム、タムスン氏は、地皮の出來しより今日迄を二千萬年以上、四億萬年ならんと云ひ、ハツクスレー氏は、地球面の沈澱が歐洲の一部に始まりし以來今日迄を、計算して、十億萬年ならんと云ひ、レング氏は有名なるエンサイクロペデヤブリタニカと云ふ大字書の中に、假定して『地質は過古の歷史を證據して今日迄十億萬年以上を經過せりと云ふに似たり』と云へり。又た名だかきベキダルヴ井ン氏は、月が地球より分離して、別世界となりてより此の方を假定して、僅づかに五千七百萬年ならんと云ひ、ウオーレース氏は、最も古るき化石より勘定して其出來しは二千八百萬年の昔ならんと云ひ、ホートン氏は地質あつて以來を計つて、二億萬年に越へざるべしとし、ニウコンブ大學教授は、太陽系統の凡べてを以て二億萬年此の方に出來し者と爲し、英國學會の會頭は、會塲演說して、地球表面に層の出來しより、未だ七億三千萬年以上、六十八億萬年を越へずと爲し米國の學術會に臨みしマキー氏は、其演說中に、地球の年齡を論じて七十億萬年ならんと云ひ、佛國のカンテー氏は、地質の元素と云ふ冊子の中に論じて、三

千萬年と云ひ、其他リーツ氏は九千五百萬と云ひ、オルカット氏は四千五百萬年と云ひ、ウハム大學教授は地層より論じて一億萬年ならんと云へるが、有名なる地質學者にして米國學士會員なるベンゼレー氏は、質朴に地球の年齢の知り易すからざるを云ひ顯はして、『余が考ふる所にては、今日の學者のみならず、後世の學者とても外の術の進歩するは疑ふべからざるも、地球の年齢計りは、とても知り得べからざる問題ならん。精算はさてをき大畧にても中々知り得るとは、難からん』と盖し或は此の言こそ最も眞ならん。

世界最長のトンネル

世界にてめづらしきは米國のセント、ブーサードのトンネルなり長がさ九哩四分の一にして、廣さ二十四丈あり。之れに次ぐものをモント、センスのトンネルとす之れは佛國とイタリーの間にありて、長さ七哩半にして、二十五呎半の廣さあり、次ぎは米國ボストンより西に向かへるトンネルにして四哩餘の長さあり。印度にも二哩餘のもの一つあり。米國ミチガンにも二哩のものありと云ふ。

鼻血の養生

炬燵に當たりて、書物を讀み居たる學生、急に書物を捨て、はんかちを以て鼻をおさへたり。鼻血はドク〱と流れ出で、鼻をおさゆれば口より出で、その當たり赤けに染みけり。母は驚きて立ち上りたれども、醫師は遠く、養生法を知らず、たゞぼんやりと手をもむ計りなり。

打こそ好けれ、隣りの妻君話なしに出で來たれり。慌わてゝ挨拶も出來ずして、椽側にかゞみたる息子を抱きかゝへたる妻君を制して、

『そんなにお頭をお下げさせ遊ばしては、鼻血は餘計

に出ますよ。早く床をおとり遊ばせ。お頭の方を少し高くする樣に坐ぶとんでも拜借。それからお冷やでも少しお上げ遊ばせ、障子は寒むくても明けた方がよろしい。此の鍵では傷たいでしようから何か金ものゝ少さいものを頂戴、お頭の後の低くゝなつて居る所へ當てゝ冷やしますから。それから手拭をゆるく絞ぼつて下ださい、額を冷やしますから。此のはんかちは餘りよごれましたから、粗らい木綿か何かを鼻に入いる丈けに丸ろめて、水に濕して、炭を小さく粉な〳〵にして、その上に丸めた木綿を轉ろばしていらつしやい、鼻の穴につめるのですから。

妻君

お蔭樣で大へん止まりました、少し勞かれたようですが温かひスップでもやりましようか。

隣の妻君

温かひものは今晩迄はいけませんよ、今は水でも少しあげる、後から牛乳をわかして冷やしておあげなさい、そしてこのつめものは血の全くかたまりてしまひ、そして獨とりで拔け出る迄では、はたからおいじりなさらないがよろしひよ。

鼻血にも種々なる種類ありて、兼ねて頭に充血がちの者か、或は脈に充血する癖のものは、鼻血によりて大に頭の快よくなるともあれども、頭に通ずる血管の細くして、血液の充分に上ぼり得ずして、鼻血となり出づるもの、或は鼻の中の血管の弱わきもの等は、屢々鼻血の癖付きて少しく、激動するか、少しく熱病で病む時は、忽ち鼻穴に熱を感じ、或は頭痛を發して、直ちに鼻血となるとあり。一度や二度は上の妻君の如き方法により、頭の後の窪ぼみたる所、及び前頭を冷やしつゝ靜づかに臥さしめて、寒冷の空氣に逢わしめ、鼻は布を水にひたし之れに木炭の細末を付けて之をさし込み、暫時冷やかなるものを與ゆる時は、止まるべ

けれども、暫々起る時は、遂に習慣となりて、少しの事にも發するに至り、甚だしきは即倒するとあれば、かゝるものは、必ず醫師の診斷を受けて、適當の治療を爲すに非らざれば、後の大患を爲すに至るべし。少年として見逃がすべからざるや。

クリスマスには何を食せんか

樂しみ茶碗

西洋にては、クリスマスには、七面鳥の料理を爲すを最も樂しみとして、子供等は、二三ヶ月前より待つとなるが、我國にては七面鳥も流行せざれば、その代用には樂しみ茶碗こそ、最も味ひよけれ、その料理法は、鯛にても、鮃目にても、兼ねて好のめる魚を取り、鱗を去り腹を開らき、茶碗に入る丈けの大きさに切り、之の切れを、又たく横と竪てに切り目を付け、その切り目の中に、卵子の黄味をたゝき込みて蒸すべし。

白酢蕪

淺つさりとしたる嗜好のものには、白酢蕪こそ良けれ、其の作り方は白胡麻を紙に上せて、火上にて一寸あぶり、擂鉢にて擂り、とうふと混ぜ、酢にてどろ〱する迄にのばし、白砂糖を入れて之を湯出たる蕪の上にかけて食すべし、豆腐をのばすに堅魚だしの酢を用ゆれば猶ほ可なり。

花梅干

花梅干も、魚の不自由なる時には、又た可なりの好味あり。梅干の肉計りを取り、擂鉢にて能く〱擂りつぶし、少しく水を入れてゆるめ、砂糖と葛粉とを適宜に入れて、火上に沸騰せしめ、取りおろして角なる入れものに入れ置き、花形若しくは望みの大さに切るべし。

つくいも油あげ

つく芋の油煮は、外の芋よりは、しやき〳〵して歯切れよく、又た一種の風味あり。つく芋皮を去りて、能く洗らひ、葛の粉と、砂糖と、鹽とを適宜に入れ、梅干程の大さに丸ろめ、牛若しくは胡麻の油にて上げたるを、スツプの身として用ゆべし。

櫻かまぼこ

櫻かまぼこは、かまぼこを櫻の形に切り、厚つさ五分計りにして串にさし、燒きながら卵子の黄味に醬油をまぜたるを付けて、狐色となりたるを度として皿にうつすべし。

豆腐包み

豆腐づゝみは、とうふを能く擂り、魚の肉を擂り込みて、之を適宜に丸ろめ、牛若しくは胡麻の油にてあぐべし。

手藝案内

自製の「シヤツ」

襯衣は綿入衣一枚の代用を爲すといふは實なり、綿入衣はたとひ厚綿といへども皮膚に密接せざれば却つて躰温を發散するの恐あり、然れども襯衣は親しく身躰に密着するを以て、隨て躰温を保つの效大なるが故に、「シヤツ」は衣服の中にては最も輕便するものなり。

「シヤツ」は唐物屋に行きても仕立屋に行きても容易に購求し得らるゝと雖も、自家にて製する方最も經濟的にして而も着用に便利あること尠からず、賣品は單に外見を能くし且つ直段の安廉なるを見せて客を惹かんとするものなれば、成るべく布帛を節約し、且つ其品質も唯だ外見の宜しきを主義とするは亦勢の免れざる所なり、かるが故に賣品は行きも丈けも身巾も充分ならず、又縫も「ミシン」を用ゐあるからに、其躰裁の

好きに似ず、動もすればバラ〳〵とほどけて、また彌縫すべからざるに至ることあり、之を自家にて製する時は、賣品の價格以下にて行き丈け身巾共に充分せるものを得らるべし、又手縫なる時は「ミシン」縫の如くバラ〳〵と解けほどくる患なし。

これより「シャツ」の製作法を案內せん、

「シャツ」に上と下とあり、上を襦袢又は上「シャツ」と言ひ、下を「ヅボン」下又は「シャツ」といふ、上下共に本「フランチル」にて綿「フランチル」にても大巾五尺あらば充分なり。

先づ上「シャツ」を製せんには五尺の大巾物(二尺巾)の中一尺二寸を兩袖に裁ち去り、之を半々に分つ時は巾一尺長一尺二寸の切を得る、これ則ち袖となるべき分なり、然れども此儘に縫ひけて筒と爲すに至ては肩も手首も同樣の大さとなるを以て手首の所に至るに從ひ斜に切りて次第に穿狹にするか、若しくは餘りの分は折込みて手首の躰裁をつくるべし、(素より腕の行きが一尺二寸とは人によりては少々長過ぎるか知らざれども、寸法を取りて長短を見計ふべし、手首には別に修飾をつけても宜しけれども、それは手縫にては面倒なれば矢張肩より手首まで一枚切にて製するが宜し)、而して大巾一尺二寸を裁ち取りたる殘餘三尺八寸の大巾二尺の內、一尺八寸を身巾とし、其殘餘四寸は「ボタン」を設くる襟に用ゐ或は手首の修飾とすべし、大巾物なれば脊縫はせず、脇附を爲し、前に記したる兩袖をつけ、裾を三四に折りて縫ひ閉づれば、身の丈三尺即ちたつぷりしたる上「シャツ」を製し得らるべし、但し前の身ごろの丈と後の身ごろの丈とは前の方後の方より二寸を短くしたる方が得策なり。

下「シャツ」則ち「ヅボン」下の裁縫は一度本紙上に記載し置きたり、これも二尺巾もあらば出來し得らる、下「シャツ」は賣品は能くほころび易きは餘り布

帛地を儉約して窮屈にこしらへあるが爲なり、自家にて大巾五尺にて製する時は、ゆつたりとして兩足の屈伸眞に自由自在なり、始めて製し試みんと欲する人は穿きふるしの「ヅボン」下を解きほどき、布帛地の上に載せて充分たつぷりと寸法を定め、殊に腰の周圍等は温暖を保つ目的にて充分丈の餘るやうにすべし、紐は別に求むるに及ばず、巾の兩端を二寸宛も裁ち去りて三つに折りて縫け、一方は腰を廻るだけ長くし一方は他の一方と結び得らるゝだけにして、又腰の一部には穴をしつらへ紐の通行自在にすべし。

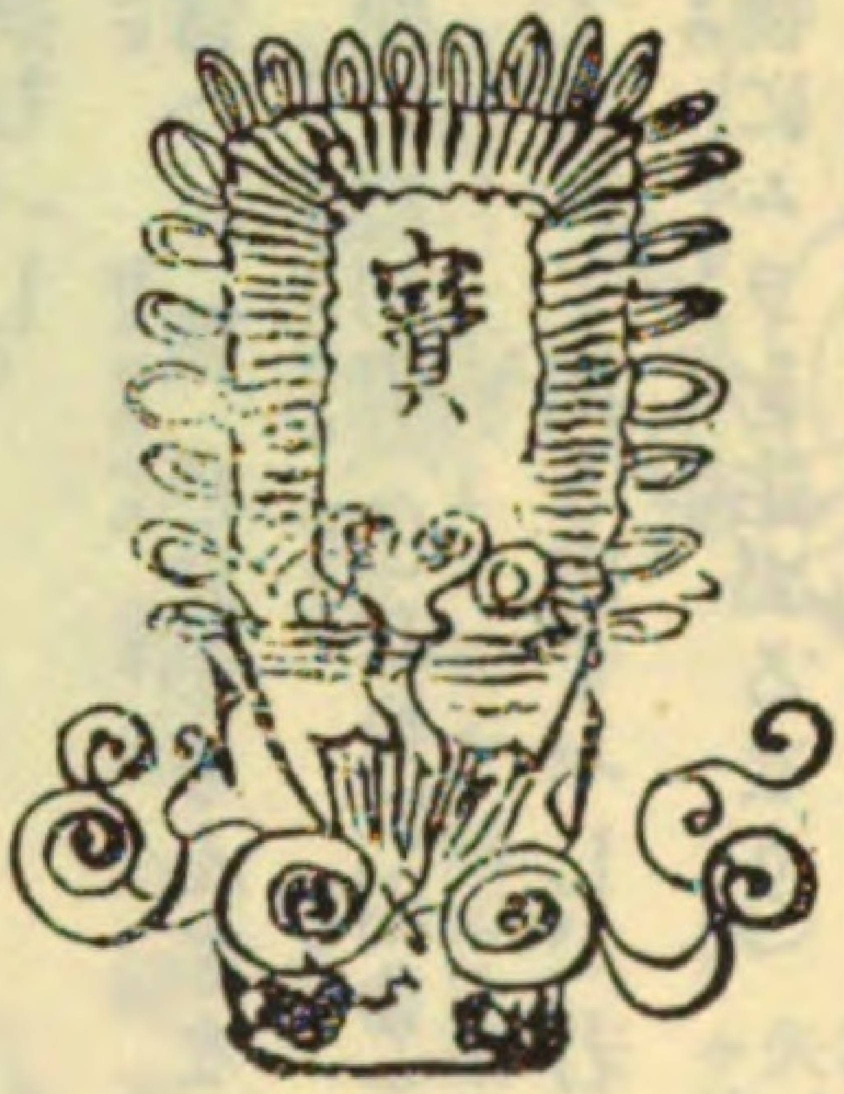
腰の部分を充分ゆるやかに製せんとせば、勢ひ腰の所に切地を足さゞるべからず、此切地は兩足の分を裁ちし餘分にて容易に取得すべし。

右に記載したる上下「シャツ」用の切地は何れの布帛にても製し得らるれども「フランチル」第一等なり、安直的にならば綿「フランチル」隨一なるべし、近來綿「フランチル」の織方頗る進歩し一見本物と異ならざるが如きものあり、それは紀州産よりも京都西陣にて織出すもの優美のもの多しと聞く、東京にては大巾一尺大概五錢より七八錢迄なれば一枚の「シャツ」は三十錢内外を以て自家にて製し得らるべし、これを同價の賣品と比較するに於ては、外見幷に實用共に實に天地の相違あるなり。

綿「フランチル」は一方のみ毛を吹き出し居るを以て、外見の惡しきを厭はず唯だ温暖を保つ主義を持せんと欲する人は、毛の方を皮膚に接するやうに仕立つべし、又「シャツ」類は隨分垢によごれ又は汗じみ易きものなれば、成るべく白色のものを撰むべし、望む所は白の無地一等とす、他の縞物に至りては隨分美麗なるものなきにあらざれども一度洗濯する時は、忽ち始めの色の褪せ果つる患あり、白色なるを撰み、成るべく屢々洗濯して着用するを要す。

押絵の巾着

押絵細工の事は前號(四十二號)に詳しく案内したり、こゝには其細工を利用して一種美麗なる巾着を製する法を記すべし。



其巾着の形は下圖に示されたるが如く、お目出たき正月用なれば、寳船なり、船體は立方菱法にして中を空洞にし、其上に美麗なる布帛を押絵の細工法にて貼りつけ、船頭にまひ〳〵ある修飾は種々なる色せる細條の布帛を貼り、船の下側に水の狀あるは、銅線に水色の絹糸を巻きつけ、帆は同じく押絵細工にして、白縮緬の地に『寳』の字を書するも面白し、帆の上端両側に突き出でたる飾品は銅線に絹糸を巻き、糸は種々の色糸を用ゐて成るべく美観を見すべし、譬へば白に紅又は白に藤或は萌黄或は桃色各々其好む所に任すべし。

寳船の後脊には守札又は懐紙等を容るべきやうに布帛又は厚紙に襞を取りたるものにて巾着様に製し、可憐なる小兒少女の腰に下げ得らるゝやうにすべし。

廢物利用

洋服を着せらるゝ諸君には、色褪せ或は汚目つきたる襟飾を持參あるべし、是等を新しき色を出して再び世に出すは、容易の業なり。

襟飾は胸の中央に位し、最も人の目に立つ修飾品なれば、少しく汚目つきたる時は忽ち廢棄して又顧みざるに至る、併しながらこれ經濟の至らざる人の所爲にして心ある人の爲すべき事にあらず。

襟飾の廢物を利用せんと欲さば、新しく染るに如かず、其染法は連號の紙上に掲載したる如く、赤にても黄にても藤にても乃至桃色にても隨意なりと雖も、蕞爾たる襟飾位にては大仕掛なる染術を行ふに由なし、襟

飾だけにては些少の染料あれば充分なれば、一錢か一錢五厘も藥舖より所望の染料を買ひ小器の中にて染め試むべし。

譬へば紫色に染めんとならば、一錢の紫染粉と五厘の燒明礬（色止めに用ゆ）を購ひ、染粉を布切に包みて湯にて振り出すべし、（若し染料を其儘に溶す時は染物にムラを生ずるなり）

之に燒明礬を加へ、染むべき襟飾を一應水に浸し能々水氣を絞りて後染料中に浸し入れ暫時其儘に放置し、又振り動かし、絞りて別器（金盥）に移し清水にて能く洗ひ流し、幾度も水をかへて其水は色のわからぬに至るべし、かくして絞り上げ能々水氣を去り陰干にし、乾燥したる後熨手をかくれば、襟飾茲に復活すること疑ひなし、唯だ注意すべきは初心の人は成るべく淡色に染めされば濃色は染上げの後他に色の移るが如きことあり。

社交一斑

流行の栞　春夢

お正月の髪飾

毎年正月を當て込み東京各小間物屋に於ては種々美麗なる髮飾を發賣し大に兒女の氣に投ずるが本年も最早いろ〳〵新形流行品を仕入れ發賣最中なり、而して本年は日清戰爭ありたるが爲め、安物は大抵日清戰爭の影響を被り甚だ俗氣を帶ぶれども高等品に至りても尙ほ其影響を蒙らざるにあらず、さらはこれより其の精の精なるものを撰み、讀者の一粲に資せんと欲す、

ほまれがけと呼ぶ近日より流行せし掛物は心入組丸打にし金メッキ勳章ヒラ〳〵房つきなり白に紫又は紅に白、白に緋等最も多く行はる、又いさほしがけと稱する同内記の平打もほまれがけと共に行はる、色は前同樣に人造「トッパース」のヒラつき、價は兩方共に十七八錢、進物品には最も妙なり（島田用）。

又勝利掛なるもの行はる、これは縮緬地に菊と聯隊旗の縫取したり、色は、紅紫、小豆、淡紫、藤紫流行の位置を占む（箱入二十八錢）之に次

げるは細縫なり（十四五錢）更紗形チャン〳〵敗北模樣（茶地）も彿々行はる價三錢五厘位なりと（唐人髷、銀杏返し用）

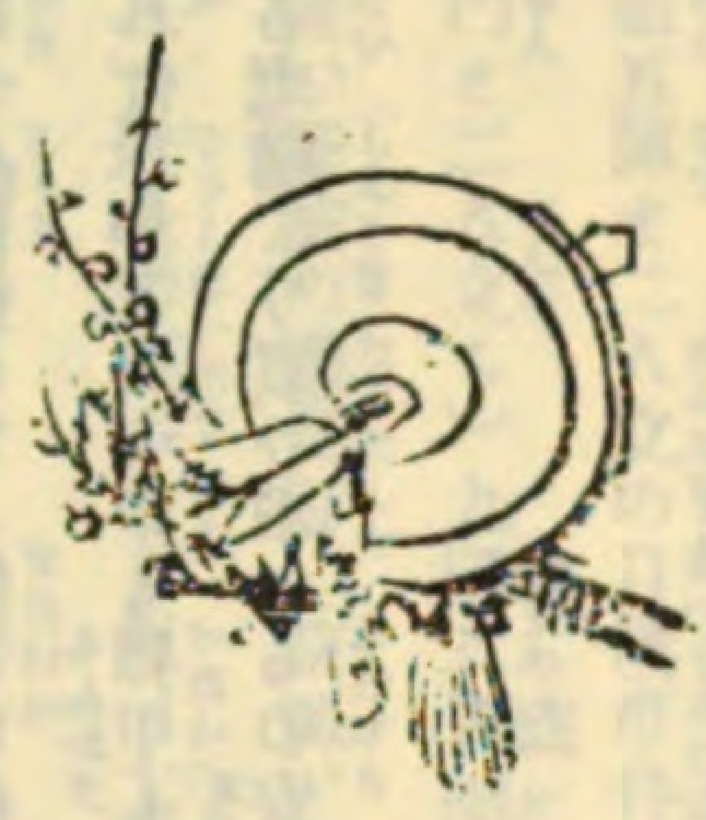
新年花簪の新形は繪樣にして之を示さん



れんたいき　金モールあしらひ絹つまみ製聯隊旗、桐、菊、梅



初だより　金モール及縮緬製梅、銚子、盃、短冊



あたり矢　金モール及縮緬製、大的、當り矢、梅ヶ枝



花づし　櫛の△子を聯隊旗とし神武天皇東征をかたどり梓弓に鷹のつまみ製

代價は二十錢より五十錢迄に至ると京橋區尾張町松田白牡丹の報に係る。

面白き櫛及簪

新年の頭飾りとして適當なるは圖に示せる簪



なり、正月の目出度きを祝し、松竹梅を取まとめ、竹葉を青貝、松葉及梅枝は丁貝を用ゐ、梅の蕾一

點珊瑚をあしらひたるは可憐限なし、脚は黒本甲を撰み紅葉を散したるも亦一段の趣味を添ゆ。



次に案内するは日清戰爭の響影を受けたる新形にして蜻蛉形とも稱すべきか其形は圖に示すが如く、「いす」臺の上に蜻蛉を高塗したる翼鬢形なり、塗の面白き所と歯のあらき所は賞めて遣るべし、價格は五十錢内外なりといふ、新形意匠品にて名の知られたる京橋區南傳馬町大西白牡丹主人の考案になる。

禮式用櫛と笄

禮式用には鼈甲細工と蒔繪とあり、鼈甲は禮式一點に用ゐられ蒔繪は禮式用にも亦一寸外出用ともなる。

鼈甲の櫛の流行形は引續き半京にして若き婦人にて山高一寸三分横三寸より三寸二三分胸巾三分五厘乃至四分、稍年齡丈けたる人にて山高一寸一分、横二寸八九分、胸二分五厘位の處を流行第一とす、蒔繪は政子形行はれお初は少しく廢れかゝりぬ、彫物も弗々行はるれども蒔繪の勢力に及ばず蒔繪の模樣も餘り片よらぬを可とす古代模樣第一なり。

笄は若き婦人向には長八寸四分五厘四分のあられ角、年増の人には長七寸以上角は四分と三分五厘角。

中挿は蒔繪の五寸以上は若き婦人、五寸以下は年增の人。
簪は金若しくは銀の珠簪、銀の手打も可又黑鼈甲に彫刻したるものも可なれども、耳搔は短く脚も亦短き蛙股を好む。
簪の珠及根掛珠は珊瑚第一シスイ珠之に亞ぎ、彫物も宜しく、銀鍍金メッキも大に行はる、瑪瑙は稍廢れたり。
右に述べたる物品は高價なるものなれば、購求者は信用ある店につき買取るを得策とす、何となれば鼈甲細工ほど素人に分らぬものはなく、譬へば本甲もキセ甲も卵甲も馬爪も素人には一見分明し難し、故に信用ある老舗より買ひ求むるの安全なるに如かず。

春衣の準備

行く水と月日の流れ止まらず早や舊き年を送りて新らしき春を迎ふる樂しみは、今より二十餘日の後となりぬ、偖て新年の新衣の流行は如何、記者は敢て衣服購求を强ゆるにあらざれど、聊か新春の流行形を記して讀者の一粲に貢せんと欲す(但し次に記するものは府下重なる二三の吳服屋より聞き得たるものなり)
婦人物言ふまでもなく、縮緬の三枚重にして、先づ令閨向には黑の五ツ紋の吹模樣に、下着二枚は白羽二重の無垢を合すべし、去れど是は餘りに極り過ぎる樣なれば、矢張色物の方流行の大勢力を有す、即ち地色を御召御納戸、藍鼠、芝翫茶、利久鼠、千歳鼠等にして模樣を、吹寄せ、四君子、桐に鳳凰、雪に寒梅、結び柳等の中にて撰み、三枚共同色に染上ぐるを可とす、然し下着二枚を他の色に好むも亦可とす、(模樣は、三枚共同一に限る) 次は令孃向なるが、相變らずの色は、藤鼠、紅掛鼠なれど又梅鼠、櫻鼠、淡利久、裏葉柳の類も大に流行の傾向あり、模樣は春草、福壽草、寒菊に梅、光淋の松竹梅、菊水、都鳥、霞に松、遠山に鶴等にして意氣なるものに至りては友燭、及ひ蔦唐草の類と知るべし、而して紋は黑と同じく五ツ所なれど又三ヶ所にするも可なり、其大きさは鯨尺にて七分より七分五厘の中が最も流行する樣なり、偖帶は例によりて例の如く繻珍織にして半襟は無論白に撰みて地質を壁千代呂、又は紋鹽瀨とすべし。
男物羽織は相變らず黑斜子にして、紋は五ヶ所と三ヶ所が互角の流行にして一ヶ所は、皆無と言ふの有樣なり、着物は上は一樂、諸糸織、等にして下着二枚を一樂、御召の小紋織か或は八端織に撰むべし袴は本練仙臺及び博多織の裏なしが流行の勢を占め、裏附なれは其裏地を甲斐絹の紺玉か淺黃玉にすべし、帶は彼の繻珍織、又は博多の紋織を以つて第一の流行と知るべし要するに男女を通して今春の流行と大

差なきが如し。

羽子板

今年は去年に比較すると桐の價が高けれど其の割合を以て高價にしては賣行きが惡かるべく該業者に取りては誠に營業の仕難き年なりといへり仕込みものは日清事件の形が多く又左團次の織姫、忠彌、天目山の火事、米藏左團次の信乃と現八、團十郎の吃又、勸進帳の辨慶、菊五郎と二人立の日清事件、菊五郎のダーク、小金井小次郎、(芝翫の新門と二人立ち)九藏八百藏の宗任貞任、八百藏團十郎の富樫と辨慶、新駒の瀧夜叉、鉄皿、十六夜等なるが尚ほ追々新工風物も出來且つ壯士俳優の分も川上福井山口藤澤水野あたりの所を見立て新形を拵へるよし又昔しと違ひ小人物にて總張もの多く半身ものは少しとぞ其の相場の大概を聞くに大看板一枚がへ十圓より五圓まで三尺(一枚がへ(以下皆同じ)百五十匁より百匁二尺五寸百廿匁より九十匁尺八百匁より六十匁又た孫十枚がへ(三百五十匁より二百匁、大京(十枚がへ以下皆同じ)百五十匁より九十匁、小京百匁より八十匁大相上百匁中六十匁下廿五匁、小相上三十匁中廿二匁下十五匁、尺廿五匁より十二匁、九寸十八匁より十五匁、八寸十五匁より十二匁、七寸十二匁、以上皆總張りものゝ直段なり其の他下等ものは例年と敢て變りなし又重なる問屋商店は本所の㊗印淺草仝の江川町の囯十軒店の舍等にて又店賣の重なる所は人形町の勝文但馬屋淺草の明林堂尾張町の荒井下谷廣小路の東京堂麴町の田中屋牛込の風市等なりと

流行子

新年の名刺は如何に流行すべきか

毎年新奇なる流行形出づれども、新奇なれば新奇なる程直ちに廢棄せられ、長く流行を續くること能はず、又單に新年形とすれば猶に短くして松の内長くして一個月に止り、其他には流通し得られざるが故に多くの人は大概新年用と平生用とを兼ねたるものを製す、されば其紙質は洋紙の上等なるを用ゐ金縁したるを最上等とす、昨今注文目に立つは紙色も一樣の浮模樣を用ゆ、譬へば松、梅の模樣等の如し、是等は必ずしも新年のみに使用するに止まらず、一方に片寄らず、四季に適用せらる。而して通常多く用ゆる、所謂厭味なき流行形ともいふべきは、「アイボリー」又は「ケント」の紙質に明朝字を用ひ、形は小形にて縱三寸小形一寸五分、大形にて縱三寸三分横二寸、其上格外の大名刺なきにあらざれど、今は少しも行はれず、斯る大名刺は撰擧競爭の時か大山師が馬車から人を訪問する外は用ゐられず、臺紙は英米舶來品多く行はる

れども、最高價なるは獨乙舶來に如かざれども價廉ならず、印刷局紙雁皮紙亦行はる。

婦人用には薄手小形の金絲第一位を占む、新形風流輸名刺さして流行するものは一種の社會に持囃さろ、其模様は六玉川、花鳥風月、能づくし等なり。

日用品物價

◎白米（一圓に付）一等白米七升●二等白米七升三合●三等白米七升七合●四等白米八升二合●五等白米八升六合

◎雜穀　本貫大麥二斗三升五合●臙塲大麥二斗三升五合●肥後上小麥一斗八升七合●同麥安一斗七升五合●船橋小麥一斗八升七合●常州小麥一斗九升七合●下總小麥一斗九升五合●札入竹林麥一斗三升並一斗四升●上割麥一斗三升五合並一斗四升五合○佐野搗粟一斗三升

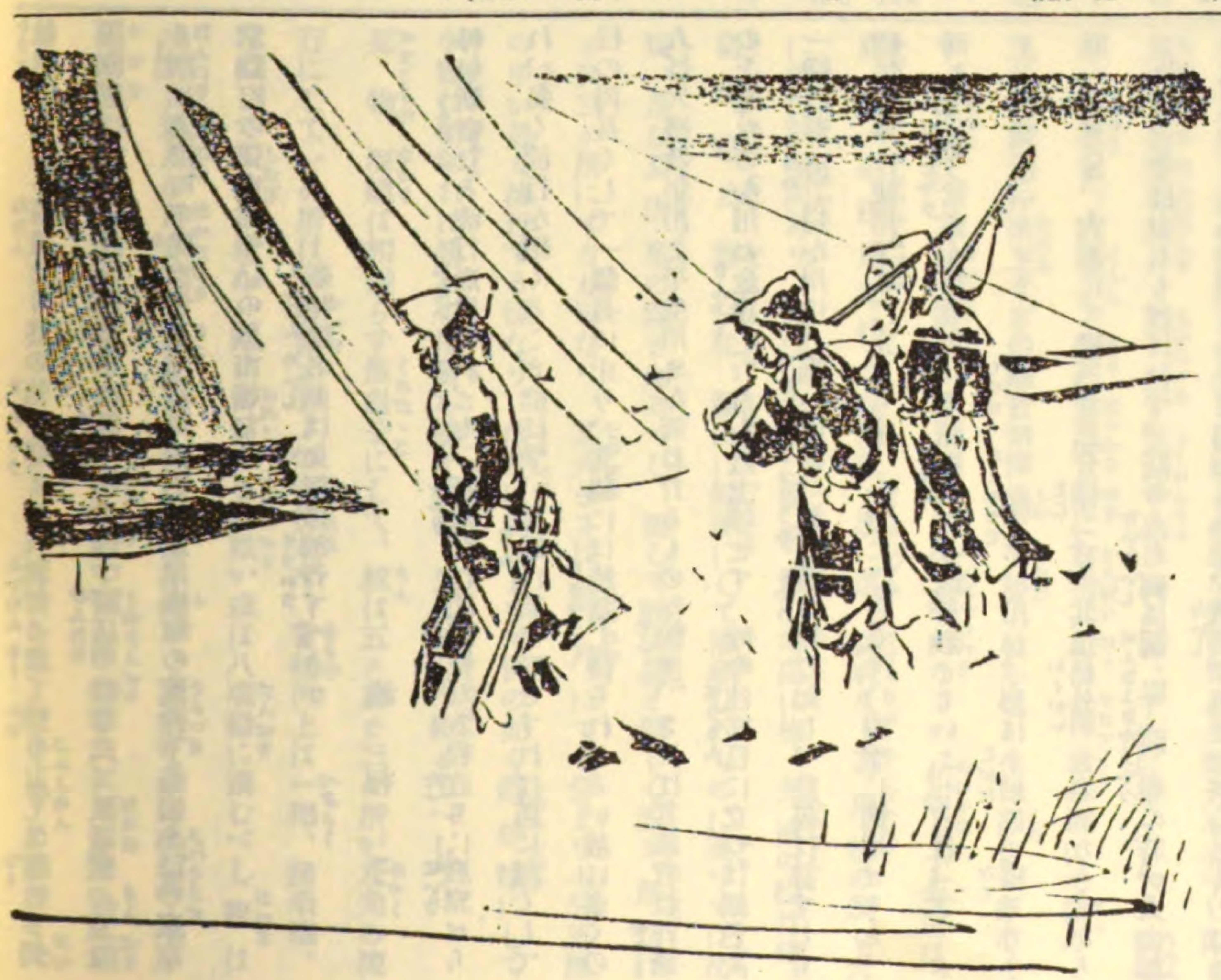
●鹽　赤穗三俵六分●大鹽幷に八家三俵七分●木齋四俵五分五厘●新齋四俵九分

◎種油　地水八圓九十錢●桐八圓四十錢●胡麻十一圓二十錢●荏油十三圓也●入山十圓也●久ト九圓七十三錢●星印九圓八十錢●井桁九圓七十五錢●イ印九圓七十錢●坂水九圓七十三錢●一川九圓七十五錢●チヤスタ一圓七十一錢●タンク一圓七十二錢○ホーキ一圓七十四錢五厘

時事一斑

遠征の人

遠征の人今如何。



薰風五月故國の山を出で、海を越え、又山を越え、而して燬くが如き夏の日に曝され、今は刺すが如き胡地の寒風に吹かる。防寒充分ならず。食充分ならず。遠征軍士の苦境憶ふべし。

温かき家庭に在るもの、大に爲す所なくして可ならんや。

思を異郷に寄す

征人十萬海の彼方に在り、思を異郷に寄するもの丶當に如何にすべきかは、已に前號に報じたる所なるが、猶聞く所に據れば下の如し。

戰地の軍人軍屬等に宛て丶發する郵便は、普通郵便差出方と同一の方法により、所屬の軍衙の名及隊名（單に在外又は海外と記し、地名を附記するに及ばず。但し地名を冠する軍衙には其地名を附記すべし）等を詳記し、直接に普通郵便局へ差出すときは、確實に宛名人に達すべし。而して該郵便物は郵便條例に牴觸せざる以上は量目、物質等に制限あることなし。

軍夫救護會

軍夫救護會、近衛公爵を會長として府下京橋區宗十郎町大日本衛生會事務所に設けられぬ。議して云ふ、

一軍夫の健康を保護し、其疾病を治療し、以て軍夫の不健康より軍隊に及ぼす困難を除くこと。

一軍夫渡航前健康上の撿査を行ふこと。

一軍夫歸朝の際疾病に罹れるものを治療し、病毒の國内に傳播するを防ぐこと。

一第一着手として軍夫救療病院を廣島に置くこと。

一漸次内地の要所に軍夫救療病院を設立すること。

一今後の情況により戰地に軍夫救療病院を設立すること。

而して義捐金は、爲替三十圓以上は第百國立銀行に、以下は東京芝區芝口郵便局あてに振出すべき筈なりと。

今の時に當て此の如き集りの作られしは、最も能く時の急務に應じたるものといふべし。

赤十字社

赤十字社々員十一月廿一日の調査に九萬五千七百四十一人あり。而して戰爭開始以來に增加したるもの實に四萬餘人。亦國民の意氣を見るべし。

犯罪の減少

征清事起りてより我が內地監獄に一種の好影響を與へたり。即ち國事犯の減じたるは勿論、普通刑事被告人も殆んど平日より一割餘を減じたるのみならず、此等の被告人も大部分は再犯者にして、新犯者は至て少なし。

是れ中等のものが多く軍夫となりて清韓に赴きたるも、其一因なるべしと雖、敵愾心の洗禮が人の志氣を喚起したるによることも決して少なかるべしと云ふ。

旅順の勝利

旅順の天險、守るに堅牢なる砲臺を以てし、稱して東洋無比といひたりしもの、一擧して我軍の占領する所となる。

勝利喜ぶべし、旅順は東大陸の咽喉たり。據て以て東方覇主の足場となすに足る。

勝利記憶すべし、十一月二十二日の朝風に吹き靡かしたる黃金山頭の旭旗は、膨脹日本宣揚の記章なり。

祝捷大會

去る九日午前七時大に不忍池畔に於て、東京市民に依て擧げられたり。

國家教育大會

十一月二十三日より三日間開かる。

會中何等の珍らしき事とてあらざりしも、戰爭と教育との關係說かれ、體育論說かれ、工業教育論說かれたるを見れば、教育界の時事問題知るべし。

大に注意せざるべからず

十一月三十日までに全國赤痢病患者十五萬百四十一人中死亡したるもの三萬五千七百人あり。

（以上十二月六日脫稿）

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行